

元明時代のタカラガイ交易と先島・琉球

中島, 楽章
九州大学大学院人文科学研究院 : 准教授

<https://doi.org/10.15017/7419083>

出版情報 : 九州大学東洋史論集. 53, pp.1-77, 2026-03-30. The Association of Oriental History, Kyushu University

バージョン :

権利関係 :



元明時代のタカラガイ交易と先島・琉球

中島 樂章

はじめに

九州と台湾の間に連なる琉球列島は、北から奄美・沖縄・先島諸島に区分される。赤道付近から温暖な黒潮が流れこむ琉球列島は、海域アジアにおけるサンゴ礁の北限域に位置している。琉球列島の島々では、海岸線から外洋にかけて、サンゴ礁が海岸線を縁取るように広がる（礁原）。礁原の外洋側には堤防状のリーフ（礁嶺）が発達し、その内側のおだやかな浅海（礁池）には、豊富な魚介類が生息している。琉球語では礁嶺をヒシ（干瀬）、礁池をイノーと称する⁽¹⁾。貝塚時代（約七〇〇〇〜一〇〇〇年前）の人々は沿海部の砂丘や段丘上に居住し、イノーでの漁撈をおもな生業としていた。貝塚時代後期に沖縄・奄美と九州の交流を促したのも、イノーで産出する貝類の交易であった。

近年では南西諸島や本土各地の遺跡における貝殻や貝製品の発掘調査が進み、貝類交易の実態が明らかにされつつある。特に代表的な成果として、木下尚子は弥生〜古墳時代に沖縄諸島から九州・西日本にゴウホラ・イモガイなどが大量に輸出され、腕輪などに加工されひろく流通したことを解明した⁽²⁾。また高梨修も七世紀以降、奄美諸島においてヤコウガイが集積・加工され、螺鈿の原材料として本土に輸出されたことを論じている⁽³⁾。

ゴウホラやイモガイなどの大型巻貝とともに、沖縄・先島諸島のサンゴ礁で大量に産出した小型巻貝としてタカラガ

イがある。そのなかでもキイロダカラとハナビラダカラは、アジア・アフリカ各地で貝貨としてひろく用いられていた。つとに柳田国男は先島諸島、特に宮古島で大量のタカラガイを産出することに注目し、タカラガイを求めて中国南部から先島・沖縄諸島に來航した人々が、日本列島に稲作を伝えたという仮説を唱えた⁽⁴⁾。現在では柳田の仮説自体は否定されているが、タカラガイ交易が大陸と先島・沖縄を結ぶ「海上の道」が成長する契機となったという着眼点はおおまかに参照に値する。ただし現時点では、貝塚時代の沖縄・先島の遺跡では、ゴウホラ・イモガイ・ヤコウガイなどと異なり、交易用のタカラガイが大量に出土した事例は確認されておらず、木下や高梨の專著でも、タカラガイ交易についてはほとんど論及していない⁽⁵⁾。

琉球列島におけるタカラガイ交易に関する專論としては、つとに伊波普猷がその琉球語である「スビ」の語源問題に關連して、琉球産のタカラガイが南海貿易の主要な輸出品となつていたと推論した⁽⁶⁾。これに対し、三島格は那覇港の御物城や福建の泉州灣沈船で大量のタカラガイが出土したことを紹介し、琉球産のタカラガイはおもに泉州や福州に、進貢船の附載商品として輸出されたと論じた⁽⁷⁾。また近年では島袋晴美が、沖縄各地で出土した各種のタカラガイ加工製品を紹介・検討している⁽⁸⁾。

このほかに沖縄・先島各地の遺跡の発掘報告書でも、黒住耐二をはじめとする専門家により、タカラガイやその加工製品の出土状況の整理・検討がなされている。ただし現時点では、それらの発掘報告書におけるデータを総合的に検討した研究は行われていない。また自然科学系の研究として、海洋生物学者の山口正士は、琉球列島におけるタカラガイのサイズや形態、生息状況などの地理的差異を全般的に論じるとともに、琉球王国時代のタカラガイ交易にも言及しており、歴史研究にとつても参考価値が高い⁽⁹⁾。

一方、文献史学の立場からは、上田信が雲南を中心に、東ユーラシアにおけるタカラガイ流通を通史的に論じた專著において、明代における琉球産タカラガイの輸出について、一章を割いて論じているのが注目される。上田は同書において、元代にはおもにビルマやタイを通じてモルディブ産タカラガイが雲南に運ばれ、貝貨としてひろく流通していた

が、明代にはおもに朝貢貿易を通じてタカラガイが雲南に供給されるようになり、特に琉球の朝貢貿易が主要なタカラガイの供給ルートとなったと論じるのである¹⁰⁾。

上田の研究は琉球の海域交流史にとっても重要な意味を持つと思われるが、従来の琉球史研究では十分に注目されていないようである。一方、近年の琉球考古学研究では、一三世紀後期から一四世紀にかけて、福建と先島・沖縄を結ぶ陶磁流通圏が出現したことが指摘されており¹¹⁾、同時期の先島・沖縄におけるタカラガイ交易の成長は、この問題にも密接に関連すると思われる。以下本稿では上田の研究を受けて、元代～明代前期(一二世紀後期～一五世紀)の先島・琉球におけるタカラガイ交易の動向について、中国・琉球の文献史料とともに、琉球考古学研究の成果も利用して再検討を試みてみたい。

一 琉球列島のタカラガイとその特徴

タカラガイ科(Cypridae)に属する巻貝は世界各地に二四五種が分布しており、そのうち五〇種がインド・太平洋のサンゴ礁海域に生息し、それらのほとんどが琉球列島にも分布している¹²⁾。特に貨幣として世界各地で利用されてきたのは、キイロダカラ属(*genus Monetaria*)のキイロダカラ(学名 *Monetaria moneta*)とハナビラダカラ(学名 *Monetaria annulus*)の二種であった¹³⁾。キイロダカラは表面が黄白色で薄いオレンジ色の環状紋があり、ハナビラダカラはキイロダカラよりやや大きく、表面は灰白色ではっきりとしたオレンジ色の環状紋がある。

そのなかでも東アジアから西アフリカにいたるまで、世界各地に広汎かつ大量に流通したのが、インド洋中央部のモルディブ諸島産のキイロダカラであった。モルディブ諸島は一一九〇のサンゴ礁の島々からなり、それらがサンゴ礁のリーフ(外礁)で囲まれ、二六の主要な環礁を形成していた。赤道附近の環礁の温暖な水域には無数のキイロダカラが生息し、それらがインド洋の東西へと運ばれたのである¹⁴⁾。

モルディブ産キイロダカラを中心とするタカラガイの交易と流通については、特に近年ではグローバル・ヒストリーの観点から、いくつもの重要な論著が刊行されている。日本では前述のように、上田信が雲南をはじめとする東ユーラシアのタカラガイ流通を通時的に展望した。英語圏では、ホーヘンドールンとジョンソンがヨーロッパ勢力によるタカラガイ貿易とアフリカ奴隷貿易の関係を論じ¹⁶⁾、ハンス・ウルリッヒ・ボーゲルも元代雲南を中心として、タカラガイの交易と使用の実態を検証した¹⁶⁾。また最近では、楊斌(Bin Yang)が世界各地におけるタカラガイ流通を全般的に論じるとともに、雲南におけるタカラガイ流通についても一連の論考を発表している¹⁷⁾。

世界各地で産出するタカラガイのなかでも、モルディブ産キイロダカラが特に大量かつ広範に輸出され流通した要因は、その生産量がきわめて豊富であるとともに、他地域産のタカラガイに比べて小型でかつ均質なためであった。一般に外温(変温)動物では、生育環境が温暖なほど成長のスピードが速いが、成長期間が短いため最終サイズが小さくなる傾向がある(温度-サイズ則)。特に水生動物は水温上昇とともに酸素消費速度が上がり酸欠を生じやすいため、陸生動物よりも温度-サイズ則の影響が顕著になる¹⁸⁾。このため赤道直下の温暖なモルディブの環礁で生育するキイロダカラは、他地域よりもかなり小型だったのである。

ホーヘンドールンとジョンソンは、モルディブ産と他地域産のキイロダカラの殻長の測定データを比較している。それによれば、モルディブの一島で採集された二二〇個のキイロダカラの平均殻長は一六ミリで、一二〜一四ミリのものも多かった¹⁹⁾。これを貝類学者が実測した、他地域産タカラガイの殻長の最小値と比較すると、【表1】のようになる²⁰⁾。

これによれば、モルディブ産キイロダカラは平均殻長でも、琉球以外の諸地域産の最小殻長よりも小さかったことになる。琉球の数値もあくまで最小値であり、全体的にはモルディブ産の方がかなり小さい。タカラガイの殻長の個体変異は同一地域においても性別や棲息場所によつ

【表1】モルディブ産・他地域産キイロダカラの殻長

産地	殻長	産地	殻長
モルディブ	16.0 mm	グアム	16.8 mm
タイ	23.0 mm	ハワイ	21.0 mm
フィリピン	16.4 mm	東太平洋	25.1 mm
琉球	15.0 mm	西オーストラリア	18.8 mm

*モルディブは殻長の平均値、他地域は殻長の最小値。

て差異が大きいので²²⁾、このデータも一般化はできないが、モルディブ産キイロダカラが他地域産よりもかなり小型だったことは確かである。

産出量が豊富なうえ、小型で均質であったモルディブ産キイロダカラは、他地域産のタカラガイに比べて輸送コストが低く、交易にも便利であり、貯蔵にも都合が良く、価格表示にも適していた。モルディブ諸島がインド洋の東西を結ぶ海上交通の要衝に位置していたこともあって、アフロ・ユーラシア各地にひろく輸出されたのである²³⁾。

ただしこのデータによれば、琉球産キイロダカラの殻長は、より低緯度に位置し平均水温が高いタイ・フィリピンや太平洋上の島々より小さく、温度・サイズ則には符合しない。その要因は明確ではないが、沖縄本島各地で採集したハナビラダカラの形態の地理的相違を分析した入江貴博によれば、同じ地域でも個体の棲息密度が高い地点ほど、幼貝の成長速度が速く、成貝のサイズが小さくなる傾向があるという²⁴⁾。タカラガイの棲息に適したサンゴ礁が広がる琉球列島ではそれらの分布密度も高く、それによって水温の割にサイズが小さいのかもかもしれない。モルディブ産キイロダカラの殻長が他の熱帯地域に比べて顕著に小さいことも、水温の高さに加えて分布密度の高さにもよるのであろう。

一方、琉球列島の内部では、タカラガイの殻長と海水温との間に明らかな相関関係が認められる。琉球列島のサンゴ礁では、島々の周りに平坦な礁原が発達し、その内部にはおだやかな礁池（イノー）が広がる。琉球列島ではハナビラダカラはおもに礁原の岩盤上に、キイロダカラは礁池のサンゴ群落周辺に棲息しており、棲息数はハナビラダカラのほうがキイロダカラより多い²⁵⁾。山口正士は琉球列島の一三の島々のさまざまな礁原で採取したハナビラダカラの殻長を実測し、礁原ごとの平均値を示している²⁶⁾。【表2】では山口のデータに基

【表2】琉球列島各地におけるハナビラダカラの
最小・最大平均値

諸島	島名	最小平均値	最大平均値
奄美諸島	奄美大島・徳之島	21.21 mm	23.74 mm
沖縄諸島	沖縄本島・伊平屋島・伊江島・瀬底島・粟国島・渡名喜島・久米島	18.70 mm	23.88 mm
宮古諸島	宮古島・多良間島	17.28 mm	19.33 mm
八重山諸島	石垣島・竹富島・黒島	15.11 mm	18.53 mm

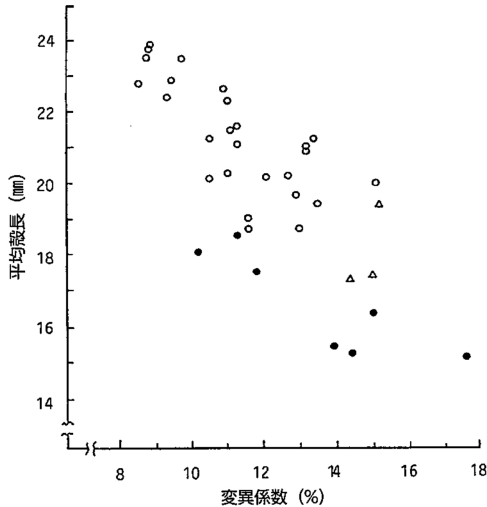


図1 琉球列島各地のハナビラダカラ個体群の平均殻長と変異係数

○奄美・沖縄諸島 △宮古諸島 ●八重山諸島
 (山口正士「サンゴ礁の貝類資源【2】タカラガイ属
 (その3)」p.256, 図6)

づき、奄美・沖縄・宮古・八重山諸島について、ハナビラダカラの殻長平均値が最小の礁原と最大の礁原における、それぞれの平均値を示した。

一見して奄美から沖縄・宮古・八重山諸島へと南下するにつれ、平均殻長が小さくなっていることがわかる。全体としても、奄美・沖縄諸島では瀬底島・久米島を除き平均値が二〇ミリを超えているが、宮古・八重山諸島では二〇ミリを超える地点はない。山口は琉球列島各地の礁原ごとに、縦軸にハナビラダカラの平均殻長、横軸にその変異計数(平均殻長のばらつき具合)をとって分布を示している【図1】。奄美・沖縄諸島より宮古・八重山諸島の方が平均殻長が小さく、殻長のばらつきが大きいことが見てとれる。

なおキイロダカラについては奄美諸島のデータはないが、沖縄諸島における採集地ごとの殻長の平均値は一八・六七〜二三・六六ミリ、宮古・八重山諸島では一六・三六〜一八・五六ミリとなり、沖縄諸島の最小平均値が宮古・八重山諸島の最大平均値より大きくなっている²⁸⁾。石垣島の水温の年平均値は那覇よりも一度高く、那覇の水温の年平均値は奄美より一度高いので²⁹⁾、琉球列島におけるタカラガイの殻長の地域的差異は、明らかに温度・サイズ則に符合している。

一方、やはり山口正士のデータによれば、西太平洋各地のハナビラダカラの平均殻長は、和歌山県白浜で二〇・六五ミリ、フィリピンで一七・七二〜一七・九一ミリ、ボルネオ北部で二一・五九ミリ、ニューギニアで一八・一六ミリとなる²⁸⁾。これらの平均殻長は、奄美・沖縄諸島産のハナビラダカラよりはいくぶん小さめであるが、八重山産よりは全

一般的に大きく、フィリピン産を除いては宮古産よりも大きい。

このように琉球列島は北回帰線以北の地域としては例外的にサンゴ礁が発達し、そこに棲息するタカラガイも豊富であった。かつ琉球列島、特に先島諸島産のタカラガイは、ハナビラダカラ・キイロダカラを問わず、緯度の高さの割には小型であり、比較的輸送コストが低く交易や価値貯蔵にも便利であったため、モルディブ産キイロダカラの代替品として受け入れられやすかったと思われる。

二 元代雲南のタカラガイ流通と南海貿易

中国大陸では古代からタカラガイが威信財として珍重され、九世紀からは雲南において貝貨としてひろく流通しているが、琉球産タカラガイが中国に輸出されたことが文献上確認できるのは、明代の一五世紀中期以降のことである。しかし筆者は、すでに元代には特に先島産のタカラガイが、福建に多量に輸出されていたのではないかと考えている。この問題を論じるに先だち、ここではまず元代雲南におけるタカラガイ流通の概要を略述しておこう。

一三―一四世紀はモンゴル時代における長距離貿易の発展とも連動して、地域間通貨としての銀の流通が活発化するとともに、地域内通貨としてのタカラガイの流通も拡大した時期であった。元代雲南におけるタカラガイ流通については、前節で紹介した上田信、ハンス・ウルリッヒ・ボーゲル、楊斌などが全般的に論じており、中国語圏でもいくつもの専論が発表されている。さらに筆者は最近、これらの研究を参照して、この問題を雲南の貨幣政策や泉州の市舶司貿易との関連に注目して検討を加えた。以下、おもにこの拙稿に基づき、元代雲南におけるタカラガイの供給とその流通について概観しておきたい⁽²⁹⁾。

タカラガイの最大産出地はインド洋のモルディブ諸島であった。モルディブ産のキイロダカラは供給量が潤沢で、かつ小型で均質だったため、輸送・交易・貯蔵に適しており、インド洋の東西にひろく輸出された。モルディブ産キイロ

ダカラは、特にインド洋東部のベンガルやビルマのペグー(パゴ)、南シナ海域のシャムなどに大量に輸出され、ビルマやシャムから北方の雲南にも転送されていた。雲南ではタカラガイを「海肥」(海巴)・「海貳」などと称し、九世紀から地域内貨幣としてひろく流通していた。元代までに雲南ではタカラガイ八〇個を一「索」とする計数単位が定着するが、これもベンガルやシャムの計数法の影響を受けたものである。

雲南は一二五五年にモンゴル帝国の支配下に入り、一二七六(至元一三)年には雲南行省が江南からタカラガイ移入を図ったが、現地官僚がタカラガイの過剰供給を招くとして反対したため中止された。ただし雲南におけるタカラガイの流通秩序を維持するためには、外部からタカラガイを継続的に移入する必要があり、ビルマ・シャムルートなどによるタカラガイの移入は継続していたにちがいない。

しかし一三〇一(大徳五)年には、元朝は雲南の現地有力者がひそかに「私貳」を移入することを禁じている。当時、元朝はビルマのパガン朝、タイ北部のラーンナー王国に同時に侵攻しており、ビルマ・シャムルートによる雲南へのタカラガイ供給量は大きく減少していたはずである。その代替ルートとして浮上したのが、泉州など江南の市舶司から、江南(四川以外の旧南宋領)を経て雲南にタカラガイを運ぶ経路であった。この法令では雲南行省が特に江南ルートでのタカラガイ供給を掌握し、現地有力者による私的移入を排除することを図ったのだと思われる。

一三〇五(大徳九)年にも、元朝は雲南において「貝の本土に出ずるに非ざる者」を通貨として使用した場合、紙幣(宝鈔)偽造と同様に処罰することを定めた。また一三三一(至順二)年には官府や商人が「他貳」を雲南に移入することも禁じている。一方で一四世紀の雲南では、土地売買に際して「真貳」という語を用いてタカラガイの価値表示を行うことも多い。この「真貳」とは雲南で基準貨幣として流通していたモルディブ産キイロダカラを指し、「貝の本土に出ずるに非ざる者」ないし「他貳」とは、より大型の他地域産タカラガイを指すのであろう。一五世紀以降、明朝や日本では唐宋銭などを「精銭」とみなし、一枚||一文の基準貨幣とするとともに、私鑄銭などを「悪銭」とみなし、流通から排除し、あるいは一枚||数文として減価使用する、「揀銭」・「撰銭」が行われた。同じように元代の雲南でも、モル

デンプ産キイロダカラ（真貳）に対して、他地域のタカラガイ（他貳）を減価使用することにより、タカラガイ流通の階層化が生じていたのだと考えられる。

実際には一三世紀末から、多量のタカラガイが海域アジアから泉州に移入されていたことを示すのが、宋元交替期の泉州湾沈船から出土した多量のタカラガイである。この沈船は一二七七（至元一四）年にマレー海域から帰航した際に、泉州湾で沈没したと推定されており、各種の南海産品のほか、二二八六個のタカラガイが出土し、うち二〇〇〇個以上がキイロダカラであった。この船はおそらくマレー海域でインド洋から運ばれたモルデンプ産キイロダカラなどを調達し、泉州に積み帰ったのであろう。

元代には泉州へのタカラガイ輸入はさらに拡大した可能性が高く、それらは泉州市舶司を通じて、長江水系を経て雲南に供給されたにちがいない。一方、雲南におけるタカラガイ需要が増大するなかで、雲南への非公式なタカラガイ（私貳）の輸入は止まず、またモルデンプ産キイロダカラ以外に、他地域のタカラガイ（他貳）も流入しつづけたであろう。一四世紀の雲南では基準貝貨であるモルデンプ産キイロダカラ（真貳）と、減価使用される他地域のタカラガイ（他貳）がともに流通し、両者の階層化によって雲南の貝貨流通秩序はおおむね安定的に維持されていたと考えられる。

泉州市舶司などを窓口とする、江南ルートでの雲南へのタカラガイ供給が拡大するなかで、新たなタカラガイの供給地として登場したのが琉球であった。海域アジア諸国のなかでも、先島・沖縄は福建にもっとも近いタカラガイ産地であり、雲南におけるタカラガイ需要の増大にともない、先島・沖縄産のタカラガイが福建を通じて雲南に供給されるようになったことは想像にかたくない。明代に琉球の朝貢貿易を通じてタカラガイが供給されるに先立ち、すでに元代から先島・沖縄産のタカラガイは福建經由で雲南に運ばれていたと考えられるのである。従来の研究ではほとんど注目されていないが、一四世紀における琉球の海外貿易拡大には、タカラガイ交易の発展も大きく寄与していたのではないか。

三 一三二七年、「密牙古」人の温州漂着

琉球列島のなかでも特にサンゴ礁が発達し、タカラガイを豊富に産出したのが先島諸島である。かつ先島は琉球のなかでも中国大陸との距離がもつとも近く、タカラガイ交易もまず先島から始まったことを予想させる。ただし先島諸島については、古琉球期を通じて同時代的な文献史料がきわめて乏しく、一六世紀以前のタカラガイ交易に関する記録も皆無に近い。

そのなかで先島諸島に関する初期の文献史料として従来から注目されてきたのが、明代の『温州府志』に記された、「婆羅公管下の密牙古」人の浙江温州への漂着記事である。この漂着事件については、『元史』仁宗本紀、延祐四（一三二七）年十月条に、次のような簡明な記事がある。「海外の婆羅公の民、往きて海番に買するに、風濤に遇い、存する者十四人、漂いて温州永嘉県に至る。江浙省に勅して、資して郷に遣還せしむ」²⁰。すなわち一三二七年に「婆羅公の民」一四名が、「海番」に交易に赴く途中で、江浙行省の温州路永嘉県に漂着し、朝廷は江浙行省に彼らの送還を命じたというのである。

さらに弘治『温州府志』（一五〇三〔弘治一六〕年刊）巻一八、雑誌には、この事件に関するより詳細な記事が収められている。ここではその全文を、便宜上三部分に分けて引用することにした。

（一）延祐四年六月十七日の昏黄時分、舵無き小船有り、永嘉県の海島中界山、地名燕宮に在りて飄流す。内に二十人有り、五人は身に青黄色の服を穿、九人は並な白衣なり。内一人は小木を携帶し子〔字〕を刻む。長短等しからず、計三十五根たり。上には圈画を刻記し、字様を成さず。葫蘆八枚を提繫し、内には俱に青黄白色の串を成す硝珠有り。その人の語言は辨らかならず、通曉せる人無し。

（二）本路は人形・船隻の図を彩画し、官を差して、各人をば江浙行省に解起せしむ。当年十月、中書省事を以て聞

す。旨を奉じ、語言に通曉せる人を尋訪し、詢問し得たり。海外婆羅公管下の密牙古の人氏、凡そ六十余人、大小の船隻二艘に乗りて、撒里即の地面に往きて、物質を博易せんと欲するに、中途に風に遇いて、大船は已に壞れ、惟だ十四人のみ小船に乗駕し、漂流して此に至ると。

(Ⅲ) 旨有り、命じて泉南に発往し、人の彼に往く有るを候[※]ちて、便に順い本国に帯回せしむと云う³¹⁾。

まず(Ⅰ)では、延祐四年六月に温州路永嘉県の海島に小船が漂着したことを伝える。その乗員一四人のうち、五人は青色や黄色の、九人は白色の衣服を着用していた。そのなかには判読不能の字画を刻んだ三五本の木簡や、八個のひょうたんに入れた数珠状のガラス玉を持つ者もいたが、彼らの言葉は誰も理解できなかったという³²⁾。

つづく(Ⅱ)では、この漂流民に対する審問結果と処置を記す。温州路は彼らの身柄を杭州の江浙行省に送り、中書省の上奏を受けて、皇帝仁宗は彼らの言語に通曉する者を派遣して審問させることを命じた。漂流民たちの供述によれば、彼らは「婆羅公管下の密牙古」人であり、六〇余名が大小の船二隻に乗り、「撒里即」に貿易に赴いたが、暴風により大船は沈没し、一四名が乗った小船だけが永嘉県に漂着したのだという。そして(Ⅲ)によれば、仁宗はその報告を受けて、彼らの身柄を泉南(泉州)に送り、便船により故国に送還することを命じたのである。

これらの記事を最初に紹介したのは、一九一七年の藤田豊八の論文である³³⁾。藤田は温州に漂着した「婆羅公管下の密牙古」人について、まず「密牙古」(近世音 *mi-ia-ku*) を宮古島に比定する。また「婆羅公」(近世音 *pho-luo-kung*) とは、近世琉球で中級士族の称号であった「親雲上」の異称「牌金」の転訛であり、「各島の首領の称」だと推定した。

これに対し、東恩納寛惇は一九四一年の著書において、「密牙古」はたしかに「宮古」を指すが、「婆羅公」は発音が遠く宮古島とも無関係な「牌金」には比定できないと説く。そのうえで一四七七(成化一三)年に先島諸島に漂着した濟州島民が、宮古島を「惇羅弥古」(朝鮮音 *pa-lam-i-go*)、すなわち「惇羅」+「弥古」と称していることから³⁴⁾、「婆羅」とは「惇羅」と同じく、宮古島東南端の「保良」地方を指すと推定したのである³⁵⁾。その後は東恩納説により、「婆羅公管下の密牙古」人とは宮古島の保良地域の住民を指すことが定説化している。

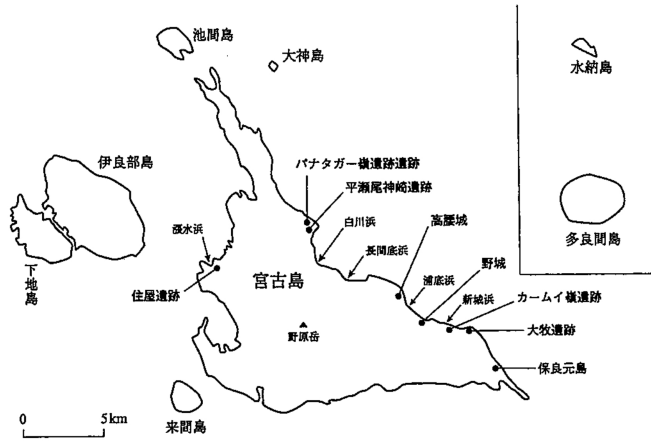


図2 13世紀以前の宮古島集落遺跡

(下地和宏「陶磁貿易と宮古」p.334, 図2)

航してゐた事」を認めている⁴⁶⁾。藤田の見解はひろく受容され、琉球船が南海諸国にタカラガイを輸出したとする伊波普猷説や、中国南部からタカラガイを求めて琉球に渡来した人々が稲作をもたらしたという柳田国男説にも影響を与えた。これに対し、田中俊雄は一九五三年の論考において、宮古島民が温州に漂着した旧暦六月は、夏季の南西モンスーン

宮古島の集落遺跡のうち、一三世紀以前の陶磁が出土する遺跡は八か所ほどあるが、西岸の住屋遺跡を除く七か所は、すべて東岸に沿って分布しており、初期の集落形成が東岸部から進んだことを示している【図2】⁴⁶⁾。このうち宮古島東南端の東平安岬^{ひがしへんま}北方の台地上に位置するのが保良元島遺跡^{ほらむとすま}である。のちにこの集落は廃絶し、一七一六(康熙五五)年にあらためて東平安岬の西方に村立てしたので現在の保良集落である⁴⁷⁾。濟州島の漂流民が宮古島を「倭羅弥古」(保良+宮古)と称したように、おそらく一五世紀にいたるまで宮古島の東岸一帯を「保良」と称していたのであろう⁴⁸⁾。

それでは「婆羅公管下の密牙古」人たちが交易に赴こうとした、「撒里即」(近世音 *Sarijok*)とはどこを指すのだろうか。藤田豊八は「撒里即」とはマレー語で「海峡」を意味する *salat* の対音であり、汪大淵『島夷誌略』に記す「昔里」と同じく、シンガポール海峡を指すと推定した。藤田はこれによって、一四世紀初頭には「宮古島人は……已に馬來半島の南端に通商」しており、この記事は「琉球人南洋通商の最古の記録」であると論じたのである⁴⁹⁾。東恩納もこの点については、「宮古島民が十四世紀の末に於て已に南洋の地に渡

がもつとも卓越する時期であり、この時期に宮古島民がシンガポール方面に向かったとは考えがたいと指摘する。田中も説くように、のちに琉球王国が東南アジア諸国に派遣した商船も、つねに秋冬期の東北風で渡航しており、一四世紀の宮古島民が、夏季の南西風に逆行して東南アジアに渡航できたとは思えない。このため田中は彼らの渡航先は南海方面でも中国方面でもなく、「実は本島内の某方面をめざしていたのではなかったか」と推定するが、沖縄本島のどこであったかは不明とする⁽⁴¹⁾。

ただしその後も、「撒里即」の所在をめぐる議論は決着を見ていない⁽⁴²⁾。最近ではグレゴリー・スミッツが初期琉球史の専著と琉球通史において、藤田説により宮古島民は一四世紀初頭には東南アジアに交易に赴いており、一四世紀末には中山王国が宮古島を通じて南海産品を入手し、明朝や朝鮮への中継輸出を開始したのだと論じている⁽⁴³⁾。

しかし「撒里即」をシンガポール方面とする見解は、季節風の問題にくわえ漢字表記の面でも首肯しがたい。マレー語の「海峡」の欧文表記は、藤田の記す *sa:ra* ではなく *sa:ra* (ストラト) であり、「島夷誌略」の「昔里」(近世音 *sa:ri*) もその音写である。「撒里即」の「撒」は例外なく *sa* 音の音写に用いられ、また外来語の漢字音写では、一般に語末の子音字は表記しないので、「撒里即」(*sa:ri:ra*) を *sa:ra* の音写とするのは無理がある。

明清時代の冊封使が編纂した琉球語彙集のうち、陳侃『使琉球録』(一五三四〔嘉靖一三〕年)の「夷語」では、「サ」音をもつばら「撒」で表記し、「里」は「リ」音の表記に用いられる⁽⁴⁴⁾。また李鼎元『琉球訳』(一八〇〇〔嘉慶五〕)では、「ツイ」音をもつばら「即」で表記している⁽⁴⁵⁾。したがって「撒里即」は「サリツイ」と読むことができる。

この「撒里即」(サリツイ)とは、琉球本島南部の「佐敷」の音写ではないか。琉球本島中南部の方言では、「キ」*ki* 音を「ツイ」*twi* と発音する。また宮古島でも、北中部では「キ」音はそのまま *ki* と発音するが、保良地方などの南部では「ツイ」*twi* と発音する⁽⁴⁶⁾。一四世紀段階でも、佐敷が位置する本島南部、保良が位置する宮古島南部の双方で、「佐敷」は「サシツイ」のように発音されていたにちがいない。「佐敷」(*sa:si:twi*) と「撒里即」(近世音 *sa:ri:ra*) では、語中子音の *s* と *r* が異なるだけである。また「里」と「是」は草書などでは混同しやすく、もし「撒里即」が「撒是即」

(sai-shi) の誤記であつたとすれば、「佐敷」^{サシツ}と完全に一致することになる。

佐敷は島尻^{シマシロ}(沖縄本島南部)地域の東北部、中城湾^{ナカキタ}の南岸に位置する。中城湾を望む丘陵台地上の佐敷グスク(佐敷上グスク)は一四世紀初頭〜一五世紀に最盛期を迎えたとされ、第一尚氏王朝を開いた尚巴志はもともと佐敷の按司であつた⁴⁷。佐敷グスク南方の入江には馬天港^{ウマテン}が、その北方には与那原港^{ヨナハラ}があり、いずれも島尻地域と北方の奄美・九州、南方の先島を結ぶ交易港となつていた。宮古島から見れば、沖縄本島の主要港のなかでも、馬天港・与那原港はもつとも距離的に近い。

おそらく宮古島東岸の保良地域の諸集落は、毎年共同で海船を仕立てて、夏期の南西風で佐敷の馬天港・与那原港などに派遣していたのではないか。一三一七年にも大小二隻の船団が保良から佐敷に向かつたが、暴風により漂流し、一人が乗つた小船だけが温州に漂着したのだと思われる。したがつて『温州府志』の記事は、「琉球人南洋通商の最古の記録」というよりも、一四世紀初頭までに宮古島民が島尻に交易に赴いていたことを示すと見るべきであろう。

四 福建産粗製白磁の先島・沖縄流入

『温州府志』の「婆羅公管下の密牙古」人の温州漂着記事は、宮古島民の南洋通商を示すとは考えがたいが、一方でこの記事は、一四世紀初頭の段階で泉州―先島間に海上貿易ルートが開けていたことを示している。すなわち宮古島民漂着の報告を受けて、朝廷は彼らの「語言に通曉せる人」を江浙行省に派遣したという。そのうえで彼らを泉州に送り、「人の彼に往く有るを候ちて、便に順い本国に帯回せしむ」と、先島に向かう便船で送還することを命じたのである。この便船はおそらく泉州から先島に赴く福建商船であろう。当時の福建海商は恒常的に泉州と先島を往来して交易を行つていたと思われ、福建には交易の必要上、先島の言語を解する通訳もいたようである。

それではこれらの福建商船は、いかなる商品を泉州から先島にもたらし、いかなる商品を持ち帰つていたのだろうか。

琉球三王国が明朝との朝貢貿易を始める以前に、中国から琉球に運ばれた商品については、文献史料にはほとんど記録が残されていない。その実態を示すのは考古学的資料、特に貿易陶磁である。

新里亮人は朝貢貿易開始以前における琉球への貿易陶磁の流入状況を、大きく三期に区分している⁽⁴⁸⁾。第一期(一二世紀後半～一二世紀前半)は日宋貿易の拡大期であり、博多遺跡では福建の浦口窯・閩清窯の白磁が大量に出土する。つづく第二期(一二世紀中期～一三世紀前半)は日宋貿易の最盛期にあたり、博多では福建白磁にかわり、浙江龍泉窯や福建同安窯の青磁の出土が急増している⁽⁴⁹⁾。第一期・第二期には奄美・沖繩諸島でも、数量的には少ないものの、博

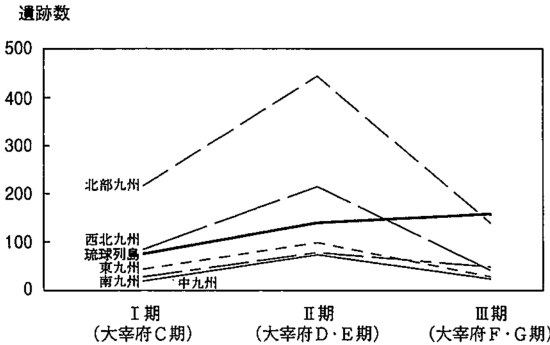


図3 九州・琉球における中国陶磁出土遺跡数

(新里亮人『琉球国成立以前の考古学』p.71, 図32)

多や九州各地と同じような陶磁が出土しており、寧波(明州・慶元)から博多に運ばれた中国陶磁が、さらに九州西岸を南下して奄美・沖繩諸島に供給されていたことがわかる⁽⁵⁰⁾。一方、第二期には先島諸島でも白磁・青磁が出土しはじめるが、量的にはごく少ない。

しかし第三期(一三世紀後半～一四世紀前半)になると、先島各地の遺跡で福建産の粗製白磁の出土が増加していく。この時期は日元貿易の時代にあたるが、元寇や元末の動乱の影響もあって、博多など九州各地での中国陶磁の出土遺跡数は急減した。一方、南西諸島では出土遺跡数が増加を続け【図3】、出土破片数も二倍以上増加し、特に先島諸島では四倍近い増加を示す⁽⁵¹⁾。

この時期に先島・沖繩で出土する福建産粗製白磁は、代表的な出土地の名により、「今帰仁タイプ」・「ピロースクタイプ」と称される。これらの粗製白磁については、木下尚子を中心とする共同研究が進められ、その産地や消費状況が明らかにされた。それによれば、今帰仁タイプは福州東北の浦口窯において、一三世紀後半～一四世紀中期に生産されたと考えられる。またピロー

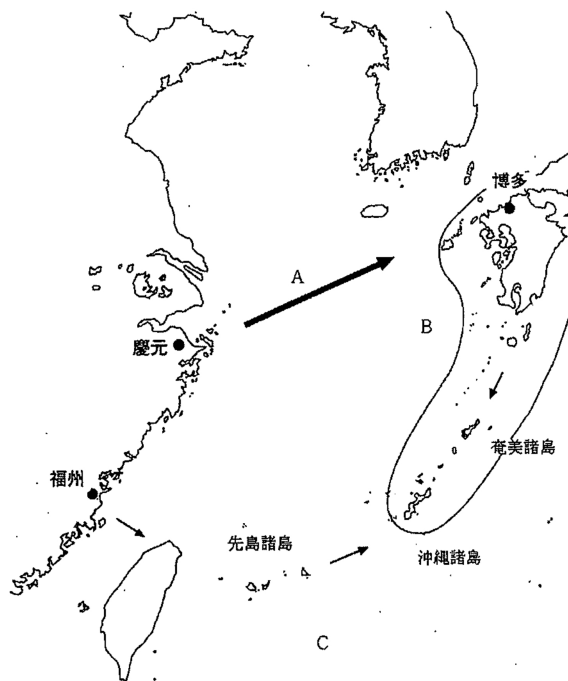


図4 13世紀後半～14世紀前半の中国陶磁流通圏

(木下尚子編『13～14世紀海上貿易からみた琉球国成立要因の実証的研究』p.253, 図5)

紀後半～一四世紀前半には、従来の博多↓奄美↓沖繩という陶磁流通圏に加え、福建から先島・沖繩に粗製白磁を運んだ交易主体については、木下らの共同研究では特に論及していない。この問題に関しては、つとに亀井明徳が宋元時代における琉球への陶磁供給ルートとして、(A)中国海商が沖繩・先島に

来航、(B)琉球の有力領主が中国に商船を派遣、(C)日本・琉球の商船が九州と南西諸島を往来、という三パターン

スクタイプはⅠ～Ⅲ類に区分され、いずれも福州西北の閩清窯において、Ⅰ類は一三世紀後半、Ⅱ類は一三世紀末～一四世紀中期、Ⅲ類は一四世紀中期以降に生産されたとされている⁽⁵²⁾。

第三期における白磁出土数に占める今帰仁タイプとピロースクタイプⅠ・Ⅱ類の比率は、先島諸島では九八%を占め、沖繩諸島でも三二%にのぼるが、奄美諸島では一〇%にとどまり、九州以北ではほとんど出土しない。こうした出土状況から見て、これらの粗製白磁は博多から奄美を経て沖繩に南下するルートではなく、福建から先島・沖繩へ北上するルートによって琉球列島に流入したと考えられる⁽⁵³⁾。すなわち一三世

を想定している。亀井はそのうえで、中国陶磁はおもに(C)を通じて琉球に運ばれたが、宮古船の温州漂着事件が示すように、(B)として先島などの有力領主が中国に派船して交易を行っていた可能性もあり、それが明朝との朝貢貿易の先蹤となったと論じた⁽⁵⁴⁾。

また吉岡康暢も宮古船の温州漂着事件に着目し、「宮古勢力主導の華南通商が一三世紀末ごろ開始され、一四世紀前半に盛期を迎え明朝の海禁令まで継続した」と論じている。吉岡はこうした宮古勢力の華南通商によって、福州または泉州から粗製白磁が先島諸島に供給され、その一・五〜二割ほどが沖繩諸島に移送されたと推定した⁽⁵⁵⁾。

これに対し、池田榮史と村木二郎は、一三世紀末ごろから福建・広東の商人たちが私貿易により宮古・八重山諸島に渡航して、福建産粗製白磁をもたらしたと推測する⁽⁵⁶⁾。さらに中村翼はこの見解を受けて、「福建地方の海民(海民的商人)」が福建産粗製磁器を先島にもたらし、それらが「琉球弧を結びつける域内流通に乗って」沖繩・奄美諸島に運ばれたと推論し、関口広次は宮古島民が中国船の船員として中国に渡航した可能性を指摘している⁽⁵⁷⁾。

亀井・吉岡説では宮古船の温州漂着を、宮古島民の海外通商を示す事案だと解するが、宮古船が向かった「撒里即」が沖繩本島南部の佐敷だとすれば、宮古船が東南アジアないし華南に交易に赴いていたとする論拠は失われる。一四世紀初期の段階で、宮古島民が逆風について黒潮を横断し中国に渡航しうるような大型外洋船を保有していたとは考えがたく、宮古島の漂流民が泉州からの便船で帰航したことからも、当時の福建→先島交易を担ったのは、やはり泉州を拠点とする福建海商だったと見るべきであろう⁽⁵⁸⁾。ただし先島の海民が、それらの福建商船に同乗して泉州に渡航し交易を行っていた可能性はある。

それでは今帰仁・ピロースクタイプの白磁は、福建からいかなるルートで先島・沖繩に供給されたのだろうか。木下らの共同研究のメンバーの見解は、それらは福建から先島を経て沖繩に北上するルートで運ばれたという点でおおむね一致する⁽⁵⁹⁾。ただしそのなかでも、金武正紀は粗製白磁の流入経路を福建→先島→沖繩ルートに限定せず、福建→先島、福建→沖繩という二つのルートで別々に運ばれた可能性もあると説く⁽⁶⁰⁾。また近年では久貝弥嗣も一三〜一四世紀にお

ける宮古島と沖繩の陶磁や錢貨の出土状況には相違が大きいことから、今帰仁・ピロースクタイプの白磁は福建↓先島と福建↓沖繩という、二つのルートにより流入したという見通しを示した⁽⁶⁾。

筆者もこれらの粗製白磁は、福建↓先島↓沖繩という単一ルートよりも、むしろ福建↓先島、福建↓沖繩という二つのルートで運ばれたのではないかと考えている。福建から沖繩本島に渡航する場合、久米島經由の直航路にくらべ、先島經由の迂回路はかなり遠回りになる。かつサンゴ礁が発達した先島諸島には大型ジャンクが入港できるような港湾はなく、福建（特に泉州）から先島に來航したのは、比較的小型のジャンク船だったと思われる。これらの小型ジャンクは先島での交易で船倉を満たすことができ、さらに沖繩本島まで渡航するメリットは乏しかっただろう。

先島↓沖繩間の交易は、泉州↓先島間を往來した福建商船とは別に、一三一七年に佐敷（撒里即）に向かった宮古船のような、現地の海船が担っていた可能性が高い。一方で沖繩本島には、おもに泉州よりも距離的に近い福州から、より大型のジャンクが來航し、龍泉窯青磁とともに福州に近い浦口窯や閩清窯の粗製白磁をもたらしたのだと思われる。

沖繩本島における今帰仁・ピロースクタイプ白磁の出土状況も、それらが先島を經由せず、福建↓沖繩ルートで運ばれたことを示唆する。宮城弘樹・新里亮人が集計した二〇〇九年段階のデータにより、のちの山北・中山・山南の領域で出土した今帰仁タイプの数量を比べると、山北で八四点、中山で二七点、山南で三点となる。同様にピロースクタイプⅠ類は山北で一〇点、中山で四四点、山南で二点、ピロースクタイプⅡ類は山北で一五一点、中山で一五一点、山南で三八点となる。全体としては山北が二四五点、中山が二二二点、山南が四三点である。また中山・山南では各地の遺跡で分散して出土するのに対し、山北ではほぼすべてが今帰仁周辺で出土している。また中山では東岸地域での出土は一六点にとどまり、他はすべて西岸地域での出土である⁽⁶⁾。

総じて沖繩本島では、一三世紀後期〜一四世紀前期の今帰仁タイプやピロースクタイプⅠ・Ⅱ類は、山北の今帰仁と中山西岸に集中して流入し、山南や中山東岸にはあまり流入しなかったようである。もしそれらが福建から先島を経て流入したとすれば、先島との交易の窓口となる山南や東岸の中城湾沿岸での出土数がより多くなるはずである。これら

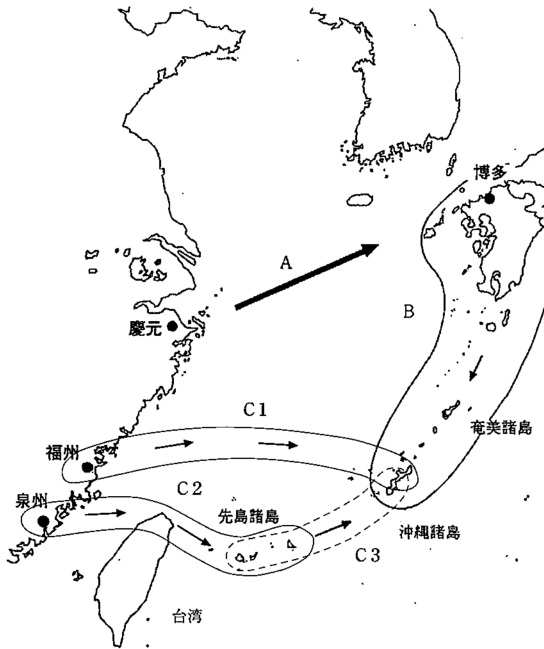


図5 13世紀後半～14世紀前半の中国陶磁流通圏（私案）

（図4を一部改訂）

の粗製白磁の多くは、福建から直接に沖縄本島西岸に運ばれていたと考えるべきであろう。

また柴田圭子が指摘するように、中山西岸でも那覇港の渡地村ではこれらの白磁が出土せず、浦添グスク・首里城・久米島での出土も少ない。このことは一四世紀前半までは、福建―久米島―那覇ルートが対外交易の幹線とはなっていないことを示唆する⁽⁶³⁾。また一三世紀後半―一四世紀前半には、貿易陶磁全体の出土量（個体数）も今帰仁グスクとその周辺集落が四三一点を数え、首里城（六一一点）や那覇港（一点）よりはるかに多い⁽⁶⁴⁾。したがって当時の沖縄では、今帰仁の外港である運天港がもつとも主要な海外貿易の窓口であった可能性が強い。運天港は那覇港とともに、沖縄本島において大型船が停泊可能な数少ない海港であり、当時から比較的大型のジャンクが来航していた可能性がある⁽⁶⁵⁾。

木下らの共同研究が明らかにしたように、一三世紀中期までは（A）慶元―博多ルート（大洋路）から（B）博多―奄美―沖縄ルートを経由して、中国陶磁が琉球列島に運ばれていたが、一三世紀後期からは、新たに（C）福建―先島・沖縄ルートによって福建産粗製白磁が琉球列島に供給されるようになった。さらに筆者は（C）の交易ルートは、（C1）福州―沖縄、（C2）泉州―先島、（C3）先島―沖縄の三つのサブルートからなっていたと考える【図5】。（C3）を担ったのはおそらく宮古島などの海船であり、

一三一七年に保良から佐敷に向かったのも、その一隻だったのではないだろうか。そして一四世紀中期に元末の戦乱により(A)慶元―博多ルートが混乱すると、(C1)福州―沖縄ルートと(B)博多―奄美―沖縄ルートがリンクし、「南島路」として一時的に日中交通の主要ルートとなったと考えられるのである⁽⁶⁶⁾。

五 タカラガイと福建白磁

それでは一三世紀後半―一四世紀前半に、福建(泉州・福州)から先島や沖縄に輸出された粗製白磁の代価として、先島や沖縄からはいかなる商品が福建に輸出されたのだろうか。木下らの共同研究では、この問題については特に論及していない。これに対し、吉岡康暢は元代には宮古勢力が主導する華南通商により、木材・馬・牛皮・苧麻布・ヤコウガイ・タカラガイなどが輸出されたと想定するが、ヤコウガイ・タカラガイは華南でも産出するので、どれほど需要があったかは不明だと説く。また関口広次は先島産の苧麻が、粗製白磁の主要代価であったと論じる⁽⁶⁷⁾。

ただし木材や馬が大量に先島から福建に輸出されたとは考えにくく⁽⁶⁸⁾、ヤコウガイの主産地は奄美・沖縄諸島である。より可能性が高いのは、関口も説くように苧麻であろう。さらに大瀧永亘は一三世紀後半から福建海商が八重山との交易を開始し、一四世紀後半からは大量の陶磁を輸出して、その代価としてタカラガイを始めとする海産物を持ち帰ったと推論している⁽⁶⁹⁾。彼らは上荷として軽量な苧麻を、底荷(バラスト)として大量のタカラガイを積みこんだとも考えられよう。

泉州湾沈船出土のタカラガイが示すように、一三―一四世紀には海外から大量のタカラガイが泉州に輸入されており、そのなかにはモルディブ産キイロダカラのほか、他地域産のより大型のキイロダカラ・ハナビラダカラも含まれていた⁽⁷⁰⁾。それらは雲南に移出され、「真贋」(モルディブ産キイロダカラ)に対し、「他贋」としてひろく流通していた。そして先島(宮古・八重山)諸島は、泉州からもっとも近いタカラガイの主産地であった。かつ第一節で述べたように、

先島産のタカラガイは東南アジア各地の産品と比べても殻長が小さく、モルデイブ産キイロダカラに比較的近い。福建海商から見れば、泉州にかなり近い地域に未開発のタカラガイの生産地が存在したのであり、彼らが先島において福建白磁の代価として、特にタカラガイを求めた可能性は高い。

また先島諸島では貯蔵具として、奄美・沖繩諸島にひろく流通したカムイヤキがほとんど出土しないのに対し、中国産の褐釉陶器壺が多量に出土する。たとえば一三世紀後半～一五世紀前半に宮古島東北岸の主要集落であった高腰城跡では、白磁片四三六点（口縁部八八点）のほかに、褐釉陶器片一六七〇点（口縁部八六点）が出土しており、福建から今帰仁・ピロースクタイプの白磁とともに、多量の褐釉陶器壺も先島に流入していたことを示す^②。これらの褐釉陶器壺は、おもに泉州の磁窰窯の産品だと考えられている。磁窰窯は福建のなかでも陶器の生産量が特に大きく、その製品は福建の需要を満たすだけでなく、泉州から南海方面に大量に輸出され、日本にも福建北部の磁器とともに流入していた^③。先島ではこれらの褐釉陶器壺を「スピガミ」と呼ぶが、「スピ」とは方言でタカラガイを指し、「スピガミ」とは「スピ甕」、すなわち「タカラガイの甕」を意味する。この呼称はタカラガイの代価として多量の陶器壺を輸入したことに由来するという説もあり、実際に石垣島では、「寶貝」という刻印をもつ褐釉陶器片も出土している^④。この「寶貝」とはタカラガイという種名ではなく「宝貨としての貝」という意味だろうが、タカラガイ交易とスピガミの輸入になんらかの関係があったことは確かだろう。

宮古島の地誌『雍正旧記』（一七二七〔雍正五〕年成立）には、宮古島北部の大浦には、福建から戦乱を逃れて移住した唐人が集落を開き、「大浦多志城」を築いたという伝承を記し、「唐人渡来のあやぐ」という次のような古謡を伝えている。「大浦多しなかる多志豊見やよい／唐の志ま福利〔州〕のしま生れよい／いくさ志ま不あワしまやれはよい／おられけく立れけくにやん称はよい／……糸巻は布巻は積あけよい／唐かめはそひかめは積あけよい／……はい風のなく風のおすたりやよい／風たとれおりたとり出ちやれやよい……」。大意は次のとおり。「大浦多志の豊見親は／唐の福州に生まれたが／いくさが絶えず／住みにくかったため／……糸や布を積みこみ／唐甕やスピガミも積みこみ／……南風が

吹くのを待つて／風とともに船出した」⁷⁵。

すなわち「大浦多志の豊見親」は福州から戦乱を避け、「そひかめ」(スピガミ)などの品々を積んで宮古島に来航し、大浦集落を開いたのだという。なお『雍正旧記』によれば、のちにこの集落は島内の戦乱によって廃絶したとされる。また考古学的にも、大浦多志城は高越城などと同じく一三世紀後半ごろに成立し、一五世紀前半には廃絶したと考えられる⁷⁶。こうした状況を考えれば、「唐人渡来のあやぐ」は、一三世紀後半に福建から渡来し、スピガミなどの中国産品をもたらした華人が、大浦などの集落形成に重要な役割をはたしたことを伝承しているのではないか。宮古島の北端近くに位置する大浦は、先島でも有数のタカラガイの宝庫であったサンゴ礁群の八重干瀬^{ヤビ}にも近く、福建華人は特にタカラガイを求めてこの地に渡来し、定住したのであろう。宮古島では他にもいくつかの集落で、同様の唐人渡来伝承が残されている⁷⁶。

なお一八世紀に採録された「唐人渡来のあやぐ」では、「大浦多志の豊見親」の出航地を一五世紀末から琉球通交の窓口となった福州とするが、元代における泉州―先島交易の成長を考えれば、本来の出航地は泉州であった可能性もある。元代の泉州は南海貿易の最大の拠点港であり、泉州から南シナ海西縁を南下してマラッカ海峡やジャワ海にいたる航路(明代の「西洋」航路)に加え、泉州から南シナ海東縁を南下し、フィリピン方面に向かう航路(明代の「東洋」航路)も成長しつつあった⁷⁷。この泉州―フィリピン航路の起点に位置するのが澎湖諸島と台湾であった。

江西南昌の人汪大淵は、一三三〇年代に二回にわたり泉州から南海諸国に渡航し、一三五〇(至正一〇)年にその見聞に基づく南海諸国の地誌、『島夷誌略』を刊行した⁷⁸。同書では「琉球」(元代には沖縄ではなく台湾本島を指す)について、「海外諸国は蓋しここより始まる」と記し、先住民が農耕・製塩・造酒を営み、砂金・雑穀・硫黄・蜜蠟・鹿皮・豹皮・麂皮^{ウサギ}などを生産していると伝える。華人商人はそれらの産品を求めて渡航し、「土珠・瑪瑙・金珠・粗碗・処州磁器」を代価として交易を行っていたという⁷⁹。

華人海商が台湾にもたらした商品のうち、「土珠」とは中国(特に華南)産のガラス玉を指す⁸⁰。琉球・先島では多

くの遺跡で勾玉・丸玉などの玉製品が出土しており、ガラス製のものもつとも多い⁽⁸⁷⁾。温州に漂着した宮古島民も「青黄白色の串を成す硝珠」を所持していたが、あるいは華南産の「土珠」を交易のため沖縄に運んでいたのかもしれない。一方、「土珠」とともに輸出された「粗碗」・「処州磁器」とは、森達也が論じるように、福建産の粗製磁器と龍泉窯青磁を指すことは疑いない⁽⁸⁸⁾。台湾から先島諸島西端の与那国島までの距離は一一〇キロにすぎず、泉州から台湾に龍泉窯青磁や福建産粗製磁器を輸出していた福建海商が、その延長線上に宮古島など先島諸島にも進出したことは十分に考えられる。彼らはそこでタカラガイをはじめとする現地産品を入手し、その代価として福州浦口窯・閩清窯の白磁（粗碗）や、泉州磁窯の褐釉陶器壺（スピガミ）などをもたらししたのである。宋代以来、泉州には後背地の徳化窯をはじめとする福建各地の陶磁、龍泉窯・景德鎮窯などの陶磁などが集積され、地元産の磁窯陶器などとともに、南海諸国に大量に輸出されていた⁽⁸⁹⁾。一四世紀までにはその一部が台湾や先島にも輸出されていたのである。

森本朝子によれば、一二〜一三世紀には従来の広東産陶磁に代わり、福建産陶磁の東南アジアへの輸出が増大しており、そのなかには浦口窯・閩清窯などの粗製白磁も多かった。東南アジア各地の遺跡では一三世紀末から中国陶磁の出土量が急増し、一四世紀に一つのピークに達するが、この時期にも龍泉窯青磁とともに、福建産粗製白磁が泉州から東南アジア各地に大量に輸出されていた。ただし一四世紀中期までには、福建中部の莆田窯産品の輸出量が、浦口窯・閩清窯を圧倒するようになるという⁽⁹⁰⁾。

浦口窯産の今帰仁タイプや、閩清窯産のピロークスタタイプが先島・沖縄に流入しはじめた十三世紀後期〜一四世紀前期は、東南アジア向けの福建陶磁が浦口窯・閩清窯から莆田窯へと移行した転換期にあたる。ちょうどこの時期に福建海商がタカラガイなどを求めて、泉州から先島・沖縄に渡航するようになり、莆田窯に押されて東南アジアでの市場が縮小しつつあった浦口窯・閩清窯を、その代価として供給したのだと考えられる。

一方、沖縄諸島に來航した商船は、泉州よりも距離的に近い福州を起航することが多かったのではないか。福建海商は沖縄でもタカラガイを調達したであろうが、彼らが求めたもつとも主要な産品は硫黄だった可能性が高い。中国では

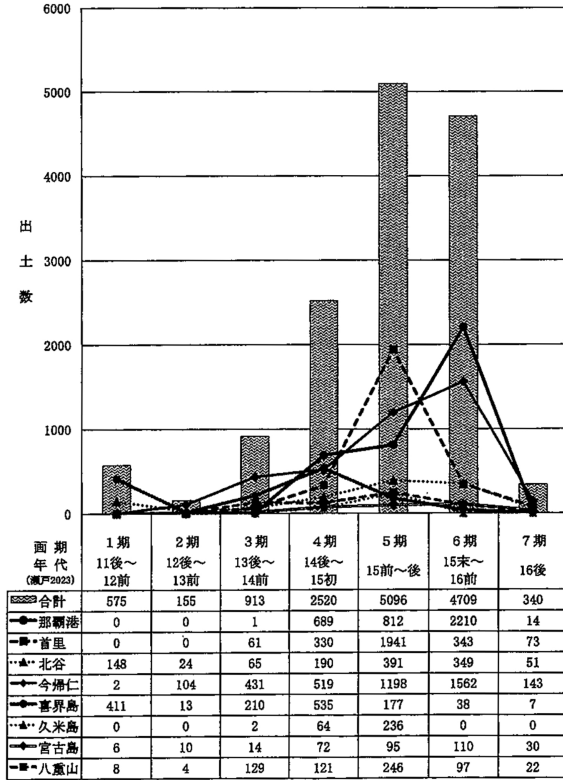


図6 琉球列島主要地域の陶磁器出土量

(瀬戸哲也「那覇港一括出土青磁外反碗の年代観」p.12, 図1)

輸出されていることから見て、硫黄島での硫黄採掘と輸出はそれ以前から本格的に始まっていた可能性が高い⁸⁶⁾。

福建から沖縄に來航した海商の主要交易拠点となったのが、大型ジャンクが停泊可能で、硫黄島にも比較的近い山北の運天港だったと思われる。今帰仁グスクとその周辺における貿易陶磁出土数は、一二世紀後期～一三世紀前期の一〇四点から、一三世紀後期～一四世紀前期には四三一点と四倍増しており、同時期の首里城(六一点)や那覇港(一点)よりはるかに多い【図6】。そのなかには龍泉窯青磁とともに、今帰仁・ピロークスタイル白磁も多く含まれている⁸⁷⁾。

宋代から各種の火薬兵器が発達したが、火薬原料である硫黄を十分に産出せず、日宋貿易により薩摩硫黄島などの硫黄を大量に輸入していた。ただし一三世紀後期には、元寇の影響により日元貿易は中断し、日本産硫黄の輸入も一時的に途絶していた⁸⁸⁾。その代替供給地として浮上したのが沖縄諸島の北方に位置する硫黄島である。琉球から中国への硫黄輸出が史料的に確認できるのは、朝貢貿易開始後の一三七六(洪武九年)以降であるが、山内晋次が推定するように、当初から計九〇〇〇斤(五・三二トン)という大量の硫黄が

今帰仁グスクに石垣が築かれて城郭化したのは一四世紀前期～中期のことであり⁽⁸⁸⁾、運天港における福建海商との交易の活発化も、今帰仁グスクの大規模化の重要な要因の一つだったにちがいない。

なお陶磁器とともに、福建海商が沖繩・先島にもたらしたと思われる主要商品が鉄製品である。一三七四（洪武七）年に明朝が琉球に派遣した使者が、「その国俗、市易には紈綺を貴はず、但だ磁器・鉄釜等の物を貴ぶ」と報告したように⁽⁸⁹⁾、琉球では磁器とともに鉄器の需要が高かった。また福建の泉州・漳州・福州は宋代から鉄生産が発達し、特に泉州では内陸部で鉄鉱石を、沿海部で砂鉄を産出し、北宋期から主要な鉄産地となっていた。鑄鉄を海外に輸出することは禁じられていたが、鉄製の農具や鍋釜の輸出は許されており、泉州からは大量の鉄製品が南海貿易によって輸出されていた⁽⁹⁰⁾。元代に硫黄やタカラガイなどを求めて沖繩・先島に渡航した福建海商が、陶磁とともに福建産の鉄製品も多量にもたらしたことは疑いない。

六 明代前期、雲南のタカラガイ流通

元代には福建海商が先島諸島に渡航して、福建製粗製白磁とタカラガイを交易するとともに、沖繩諸島にも渡航して、硫黄やタカラガイと龍泉窯青磁や福建産粗製白磁を交易していたと考えられる。こうした福建・沖繩・先島間の交易パターンは、明代にはどのように変化したのだろうか。この問題を論じるに先だち、タカラガイの供給地である琉球から、その消費地である雲南に目を転じることにしよう。

明代雲南のタカラガイ流通については、日本では上田信、英語圏ではハンス・ウルリッヒ・ヴォーゲルや楊斌などが一般的に考察している⁽⁹¹⁾。中国語圏でも方国瑜をはじめとして、明代雲南のタカラガイ流通に論及した一連の研究があり⁽⁹²⁾、最近では詹恩勝・万明・王雪瑩が財政史的な観点から再検討を加えている⁽⁹³⁾。本節では上記の研究も参照して、明代前期（一四世紀後期～一五世紀）の雲南におけるタカラガイの供給と流通の動向を検証してみたい。

雲南では元朝がモンゴル高原に撤退してからも、クビライの後裔である梁王政権の統治が続いていた。元代末期から梁王政権期にかけても、雲南ではタカラガイが主要な価値表示・交易手段であったことを示す史料として、昆明に近い晋寧の盤龍寺に残る「盤龍禪庵諸人舍施常住記」がある。この碑文には、元末の一三五（至正一五）年から、明朝成立後（雲南では梁王政権期）の一三六九（至正二九、洪武二）年にかけての一六件の土地売買が記録されている。そのうち価格不明の一件を除き、一〇件は「真贋」（モルディブ産キイロダカラ）、三件は単に「贋」、二件は中統鈔により売価が表示されているのである⁹⁵。一三六〇年代にいたるまで、少なくとも昆明附近ではタカラガイ、特にモルディブ産キイロダカラがもつとも一般的な価値表示手段であったことがわかる。ただし価格が「真贋」であったとしても、実際に交易がすべてモルディブ産キイロダカラによって行われたとは限らず、「真贋」に対して減価使用された「他贋」（他地域産のタカラガイ）が授受されることも多かつたであろう。

明朝は一三八一（洪武一四）年に梁王政権を倒して雲南を制圧する。当時の雲南におけるタカラガイ流通の一端を伝える史料として、大理の感通寺の高僧であった法天無極が、一三八三（洪武一六）年に南京で洪武帝に謁見した際に献じた「貝生賦」がある⁹⁶。無極はその冒頭で、「介虫に貝有り、車里に生ず。商賈貿易し、貨は西洱に遷る。六詔に泉流し、利は両迤に頼る。四民の日用に便い、六時の転徙に任す」と記す。タカラガイは商業交易を通じて、シブソンパシナー（車里）から大理（西洱）に運ばれ、雲南各地（六詔／両迤）に流通していたというのである⁹⁶。

ついで無極は、「五金はその低昂に任せ、百物はその向背に由る。零頓して時の有無に随い、遠近は人の負載を聴つ」と記し、雲南ではタカラガイが価値表示（低昂）・交易手段（向背）・価値保存（零頓）機能を持つことを端的に述べ、その供給は商人による移入に仰ぐとする。そして末尾近くでは、「宝鈔の大にして毀ち易き者に較べ、人情の未だ厭わざるを覚え、圓銭の代わりて号を更う者に視べ、泉法の究むこと無きを験す」と述べ、タカラガイはかさばり毀損しやしない紙幣（宝鈔）や、朝代ごとに新鑄する銅銭よりも、雲南では安定的に流通しようと説くのである⁹⁷。

実際に洪武帝は、雲南では銅銭を発行せず、従来の慣行に従ってタカラガイを使用することを認めた。無極が「貝生

賦」を献じた翌年には、秋糧の一部を金銀・タカラガイ・布などで代納することを許している⁹⁸。また明朝は雲南の諸部族の首長を「土官」に任命し、毎年一定額の金銀やタカラガイなどを管下の人民から徴収し、「差発」として上納することを命じた⁹⁹。一方、明朝は雲南でも宝鈔を導入し、官俸の支給などの財政支出に用い、商税徴収などを通じて回収したが、雲南でも全国と同様に、宝鈔の価値は濫発と回収不足により低下しつづけた¹⁰⁰。

一三九三（洪武二六）年に戸部が全国から徴収した税額のうち、海肥（タカラガイ）は三一万索（二四八〇万個）に上るが、それらはもっぱら雲南で徴税されたものである。永楽年間（一四〇三〜二四）に戸部が全国から徴収した税額も、おおむね三三〜三四万索（二六四〇〜二七二〇万個）で一定している¹⁰¹。ただし元代の一三二八（天曆元）年には科差として一一三万索を徴収し、酒課としても毎年二〇万一一七索を徴収しているのと比べると、税収額は四分の一程度に止まる。元代には雲南でも各戸に対し、税糧以外にもに貨幣納により科差を課したが、明代の税制は現物と労役の徴収を基本とし、雲南でも本来は「差発」以外に貨幣納による直接税を課していなかったことが、タカラガイの徴収額が低下した主因であろう。

明代の雲南では、タカラガイは租税の代納や、土官による上納（差発）を通じて徴収され、官員の俸給や王府への賜与などを通じて還流した¹⁰²。明代雲南の民間経済においても、タカラガイは金銀や現物貨幣とともにひろく用いられた。当時の契約文書や碑文からも、タカラガイが土地や家屋の売買、資金貸借や利息支払い、寺廟への寄進などに際して授受されていたことが確認できる¹⁰³。なお雲南においてタカラガイが出土する宋元時代の墳墓は、西部の大理周辺に集中している。またタカラガイによる交易を記録した元明時代の碑文や文献史料は、東部の昆明附近に集中し、西部の大理・永昌や南東部の臨安一帯にも分布する¹⁰⁴。大理国以来雲南西部の政治的中心であった大理や、元代から省治となった昆明を中心に、タカラガイが財政や交易を通じて流通し集積されていたことを示している。

七、明代前期、雲南へのタカラガイ供給ルート

明代前期にも元代に引き続き、雲南ではタカラガイが地域内貨幣として、金銀・宝鈔・各種現物とともに、商業流通や財政運営にひろく使用されていた。それでは当時雲南で流通していたタカラガイは、いかなるルートで雲南に供給されていたのだろうか。第一節で述べたように、元代にはモルデイブ産キイロダカラが、ビルマ・シャムルートを経て、あるいは泉州などから江南ルートを経て雲南に運ばれていた。また南シナ海産のタカラガイも、シャムルートや江南ルートにより雲南に運ばれ、「真賦」たるモルデイブ産キイロダカラとともに、「他賦」として減価使用されていたようである。明代に入っても、ビルマ・シャムルートはモルデイブ産キイロダカラなどを雲南に供給する主要ルートとして機能していた。一三八〇年代に明朝が雲南を制圧した当初は、無極が「貝生賦」で記すように、タカラガイは元代に引きつづきシブソンパンナーなどを経て商業交易を通じて雲南に供給されていた。しかしその後、洪武帝は雲南の諸部族の首長を土司・土官に任命するとともに、インドシナ半島内陸部の諸政体に「宣慰司」の官名を附与し、両者を朝貢体制に組みこんだ。それによってビルマ・シャムルートにおいても、おもに朝貢貿易を通じてタカラガイが運ばれるようになっていく。

永楽年間までに、ビルマ方面には麓川(モンマウ)・木邦(モンセンヴィ)・孟養(モーニイン)・緬甸(アヴァ)、シャム・ラオス方面には車里(シブソンパンナー)・八百大甸(チェンマイ)・老撾(ラオス)などの宣慰司を設けている⁽¹⁰⁾。これらの宣慰司は、三年に一回京師(当初は南京、のちに北京)に使者を派遣して朝貢を行うことが定められた⁽¹¹⁾。万暦『大明会典』(一五八七「万暦一五」年刊)に記す上記の宣慰司の進貢品にはタカラガイは含まれていないが⁽¹²⁾、各宣慰司の朝貢使節は、タカラガイを附帯商品(附搭貨物)として雲南に持ちこみ、交易を行ったと考えられる。

これらの宣慰司の朝貢使節は、「貢道上路」ないし「貢道下路」を利用して雲南に往来した。「貢道上路」は大理から

永昌を経てイラワディ川水系を南下し、モンマウ・アヴァを経てペグーに南下するルートである。一方、「貢道下路」は大理からメコン川・チャオプラヤ川水系を南下し、シブソパンナーからチェンマイを経て、西南に向かいペグーに至るルートである。「貢道下路」からはメコン川水系を南東に下ってラオスに向かうルートや、チャオプラヤ川水系を南下してアユタヤに向かうルートも分岐していた⁽⁹⁾。

モルディブ産キイロダカラは、ベンガル湾からペグーを経てイラワディ川水系を北上し、麓川・木邦・緬甸・孟養などの宣慰司の朝貢使節によって、あるいはアユタヤまたはペグーからチャオプラヤ川・メコン川水系を北上し、車里・八百大甸・老撾などの宣慰司の朝貢使節によって雲南に運ばれたと考えられる。また南シナ海域産のタカラガイも、モルディブ産キイロダカラとともに、シャム方面から雲南に運ばれたであろう。

ただしビルマでは一四世紀初頭にパガン朝が崩壊してから混乱状況が続き、一四世紀中期にはイラワディ川中流域にはアヴァ王国が成立し、上流域ではタイ(シャム)系のムンマオ王国が勢力を拡大するが、その後も諸勢力の抗争が続き政治情勢は安定しなかった⁽¹⁰⁾。一方、シャムでは一三世紀にチャオプラヤ川上流域にラーンナー王国、中流域にスコータイ王国が、一四世紀中期には下流域にアユタヤ朝が成立し、政治情勢はおおむね安定し交易も活発化していた⁽¹¹⁾。

モルディブ産キイロダカラを雲南に運ぶ場合、シャムルートではマラッカ海峡を通過するかマレー地峡を越える必要があり、ビルマルトよりも輸送コストが高い。しかし一四世紀以降は輸送リスクの低さからシャムルートの重要性が高まったと思われる。一五世紀前期に鄭和艦隊に参加した馬歡は、シャムに関して「国の西北に去ること二百余里に一市鎮あり。上水と名づけ、雲南の後門に通ずべし。……中国の宝船、暹羅に至るや、亦た小船を用て去き売買を做す」と記している⁽¹²⁾。この「上水」については諸説があるが、ちょうどアユタヤの西北二〇〇里(一一二キロ)強に位置するチャイナート附近と見るべきだろう⁽¹³⁾。

チャイナートの北方五〇キロほどのナコーンサワンで、チャオプラヤ川はピン川とナン川に分岐する。ピン川を遡上すればチェンマイにいたり、さらに「雲南の後門」たるシブソパンナーに通じる。ナン川を遡上すればラオス北部を

経て、やはりシブソパンナーに向かうことができる。またビルマ南部のペグーから陸路を経てチェンマイにいたり、雲南に向かうルートもあつただろう。無極「貝生賦」の冒頭に、「介虫に貝有り、車里に生ず」と記すことも、モルディブ産や南シナ海産のタカラガイがこれらのルートにより、シブソパンナーを経て雲南に運ばれたことを示している。

一方、元代にはモルディブ産キイロダカラや南シナ海域のタカラガイが泉州などに運ばれ、江南地域を経て雲南に供給されていた。しかし明初には海禁にともない民間海商によるタカラガイ輸入は閉ざされ、南海諸国の朝貢使節がタカラガイをもたらし、それらが雲南に供給されるようになった。『大明会典』に記す南海諸国の進貢品にはタカラガイは含まれていないが⁽¹⁹⁾、それらはやはり朝貢使節の附帯商品として持ちこまれ、南海諸国の朝貢貿易の窓口であつた広州から雲南に運ばれたのだと思われる。

洪武年間には厳格な海禁が施行されたうえ、海外諸国の朝貢貿易も縮小傾向をたどつたので、上記の南海ルートによるタカラガイ供給はかなり減少したであろう。しかし一五世紀初頭には、永楽帝の積極的対外政策により海外諸国の朝貢貿易は急拡大し、さらに鄭和艦隊が七回にわたり南シナ海・インド洋に遠征して国家貿易を行ったことにより、南海ルートによるタカラガイ供給も大きく増加したと考えられる。

実際に鄭和艦隊がタカラガイを積み帰つたことを伝える史料として、二〇〇九年に鄭和艦隊の出港地であつた江蘇省太倉市で発見された、「明昭信校尉陳公安人董氏合葬誌銘」がある。この墓誌は太倉衛の百戸（下級武官）であつた陳賢の事績を、その孫の依頼により、翰林院檢討であつた張泰が一四七〇年代末に記したものである。それによれば、陳賢は鄭和艦隊に乗り組んで、三回にわたつて南海遠征に参加したが、その後一四二七（宣徳二）前後にベトナム遠征に従軍した際に戦死したといふ⁽²⁰⁾。

この墓誌では陳賢が鄭和艦隊に乗り組んだ際のエピソードを、次のように記す。

会^{たまた}ま中官奉使し、將に航海して西域に通ぜんとし、壯士を江南に選ぶ。時に行伍の土は率ね百方もて避くるも、君は避けず、遂に従いて麾下に在り、最も親信せられ舎^おかず。数歳の間に三たび往き、万里の外を涉り、来返して恙^{つが}

なし。私に貨貝を撃う無く、閩中を道るに、書籍若干巻を収めて帰り、識る者はこれを賢とす⁽¹⁶⁾。

中官（鄭和）が艦隊を率いて南海に遠征するに際し、陳賢はその麾下に入り厚い信任を得た。彼は三回にわたり南海遠征に赴いたが、そのつど私的に「貨貝」を持ち帰ることはなく、帰路に福建で書籍を購入しただけだったというのである。墓誌の前後の記述によれば、彼が太倉衛百戸となったのは一四一二（永楽一〇）年以降であり、一四二七年ごろベトナムで戦死しているので、彼が参加した三回の南海遠征とは、一四一三～一二二（永楽一五～二四）年の第四次・五次・六次遠征であつたことがわかる⁽¹⁶⁾。

この「貨貝」がモルデイブ産キイロダカラを指すことは疑いない。鄭和艦隊の第四～六次遠征では、いずれも分遣隊がインド洋を直進し、モルデイブを経てアフリカ東岸に渡航しており、本隊もインド西岸のマラバル海岸を経てペルシア湾口のホルムズまで往復している⁽¹⁶⁾。分遣隊はモルデイブで直接キイロダカラを調達できたし、本隊もインドやホルムズなどでモルデイブ産キイロダカラを手できたはずである。

六〇隻以上の大船からなる鄭和の大艦隊は、船体の安定のため、船艙の底部に大量のバラストを積む必要があつた。モルデイブ産キイロダカラはそうしたバラストとして積載されたにちがいない。陳賢のような下級武官には、それらの船艙の一部分が割り当てられ、そこに私的に商品を積んで交易することが認められたのであろう。

この墓誌では彼がタカラガイを積み帰らず書籍だけを購入したことが美談として記されているが、これは逆にいえば、鄭和艦隊の搭乗者が私的にタカラガイを積み込んで帰航することが常態化していたことを示している。上級武官は上層の船艙に高額な奢侈品を積みこんだであろうが、陳賢のような多数の下級武官が下層の船艙に積みこむ商品の代表が、タカラガイだったわけである。鄭和艦隊は第一～三次遠征でカリカットまで往復した際にも、インドなどで大量のタカラガイをバラストとして積み込んだであろうから、七回の遠征を通じて膨大なタカラガイが輸入されたことは疑いない。このように永楽年間には、ビルマ・シャムルートによる各宣慰司の朝貢貿易、および南海ルートによる海外諸国の朝貢貿易や鄭和の遠征を通じて、雲南へのタカラガイ供給は急増したはずである。ただし永楽年間においても、雲南にお

けるタカラガイの流通量は、海陸の商業交易を通じて大量のタカラガイが供給されつづけた元代の水準には及ばなかったようだ。たとえば一四一一（永楽九）年には、雲南東南部の臨安府溪処甸司（けいしよけんし）の土官が上奏し、これまで毎年海肥七九八〇〇索を貢納していたが、それらを臨安府で購入して納入するため負担が大きいため、宝鈔や銀で代納することを求め、裁可されている^{10）}。

雲南省内でも昆明や大理などの財政や流通の中心地ではタカラガイの流通量は多かったが、溪処甸司のような周縁部の少数民族地域では、永楽年間にも「差発」として上納するタカラガイの調達は必ずしも容易ではなかった。南海諸国の朝貢貿易や鄭和艦隊によるタカラガイの大量供給も、海禁にともなう民間商船による供給途絶を十分に補うには至らなかったようだ。永楽年間におけるタカラガイの徴税額が元代中期の約四分の一に止まることも、税制の相違とともに、タカラガイの流通量が元代のレベルに及んでいなかったことが影響した可能性がある。それでも永楽年間から宣徳年間（一四二六～三五）年にかけては、大量のタカラガイが継続的に輸入され、雲南での流通量は増加傾向にあったはずだが、一五世紀中期にはこうした趨勢は一転して逆行することになる。

八 明代中期、雲南へのタカラガイ供給と流通

一五世紀中期以降も、雲南ではタカラガイが地域内貨幣としてひろく流通しつづけた。たとえば一四四二（正統七）年には、「雲南の夷民、交易には常に海肥・銀・塩・布貨を用う」とあり、雲南ではタカラガイと銀、および各種の現物が交易手段となっていたという^{11）}。また同時期の臨安府についても、「貝を以て交易を為し、多く積みて富有と為す」とあり^{12）}、タカラガイが一般的な交易・価値保存手段となっていた。一五〇三（弘治一六）年には、戸部が雲南などで弘治通宝を鑄造し流通させることを提議したが、朝廷では「雲南は専ら海肥を用い」ており、他省でも現物貨幣などを用いているため、「錢法通ぜざるに、驟かにこれを変えんと欲するも難し」という反対論が出された^{13）}。それでも雲南で

は弘治通宝の鑄造が実施されたが、結局は十分に流通せず短期間で中止されており、低額貨幣としてはもつぱらタカラガイが流通しつづけた⁽²²⁾。

その一方、一五世紀中期には雲南へのモルディブ差キイロダカラの供給は大きく減少したと考えられる。まず海上ルートにおいては、明朝は正統年間（一四三六～四九）から、永楽年間以来の積極的な対外政策を一転し、財政負担が大きい南海諸国の朝貢貿易を抑制する方針に転じた。これによってインド洋方面からの朝貢は急減し、一四五九（天順三年）を最後に途絶する。また東南アジア諸国の朝貢も三年一回に制限し、東南アジアからの朝貢の総数は永楽～宣徳年間（一四〇三～三五）の一〇一回から、正統～天順年間（一三三六～六四）年には五八回と半減した⁽²³⁾。また鄭和艦隊の南海遠征も一四三三（宣徳八）年を最後に終結し、その後は明朝が艦隊を派遣して国家貿易を行うことはなかった。朝貢貿易の縮小と南海遠征の終了にともなう、南海諸国からのタカラガイ、特にモルディブ産キイロダカラの輸入が急減したことは疑いない。

一方、ビルマルートにおいても、一四三〇年代からイラワディ川上流域でタイ系のモンマウ王国（麓川宣慰司）が勢力を拡大し、中流域のビルマ系アヴァ王国を圧迫するとともに、雲南西南部にも侵攻した。一四三八（正統三）年には明軍がサルウィン川を渡ってムンマオを征討するが、反撃され全滅する。このため明朝は一四四一～四八（正統六～一三）年に三回にわたって大軍を派遣してモンマウを攻撃するが（三征麓川）、その勢力を完全に制圧することはできず、イラワディ川を境界として軍を撤収した。この結果、イラワディ川以西は明朝の統制を離れ、モンマウの残存勢力やタイ系・ビルマ系の諸勢力が割拠・抗争する混乱状態がつづくことになる⁽²⁴⁾。一五世紀中期には一連の戦乱とその後の分裂割拠により、特にビルマルートによるモルディブ産キイロダカラの供給は大きく減少したにちがいない。

このように一五世紀中期には、海上ルート、ビルマルートの双方で、モルディブ産キイロダカラの雲南への供給量は大きく減少したと考えられる。一般的にはタカラガイの新規供給の減少は、雲南におけるその流通量の縮小と比価の上昇をもたらすはずである。しかし実際には、雲南でのタカラガイの対銀比価は、そのような趨勢を示していない。

元代の一二八二(至元一九)年の雲南におけるタカラガイの公定比価は、銀一兩 \parallel タカラガイ二〇〇〇個であり、一三二〇(延祐七)年における比価は銀一兩 \parallel タカラガイ二四〇〇個であった⁽¹²⁾。これに対し、明代前半期のタカラガイの対銀比価を明示する同時代的史料は確認できない⁽¹³⁾。

ただし一四三八(正統三)年には、雲南布政司・按察司に属する官員の俸給の半分をタカラガイなどで支給し、その換算率を米一石 \parallel タカラガイ三〇索(二四〇〇個)とすることが定められている⁽¹⁴⁾。当時の雲南における銀立て米価は不明だが、同年には湖広において罪囚が実刑を免れるために罰金(罰贖)を支払う際に、米一石を銀三錢(〇・三兩)で代納させ、その銀を僻遠な衛所に送付して軍兵に支給することを定めている⁽¹⁵⁾。湖広における換算率を雲南にも適用すれば、米一石 \parallel 銀〇・三兩 \parallel タカラガイ二四〇〇個となり、タカラガイの対銀比価は銀一兩 \parallel タカラガイ八〇〇〇個となる。ただし雲南では湖広よりも米産量は少なく銀産量は多かったので、米の対銀比価はより高かつたはずである。かりに雲南での換算率を米一石 \parallel 銀四錢と仮定すると、米一石 \parallel 銀〇・四兩 \parallel タカラガイ二四〇〇個となり、比価は銀一兩 \parallel タカラガイ六〇〇〇個となる。

さらに一四八一(成化一七)年には雲南において、宝鈔で納入する商税などの七割をタカラガイで代納することを認め、その換算率を場合によってタカラガイ一索(八〇個) \parallel 宝鈔一 \sim 三貫と定めている⁽¹⁶⁾。中間値をとってタカラガイ一索 \parallel 宝鈔二貫とすれば、当時の公定レートでは宝鈔一貫 \parallel 銀〇・〇〇五兩なので⁽¹⁷⁾、宝鈔二貫 \parallel 銀〇・〇一兩 \parallel タカラガイ八〇個となる。これによればタカラガイの対銀比価は銀一兩 \parallel タカラガイ八〇〇〇個となり、一四三八年の比価と一致する。ただしこの場合も、代納を受領する政府に有利なように、タカラガイの比価を市価よりも低めに設定した可能性がある。ひとまず一五世紀中期の換算率を銀一兩 \parallel タカラガイ六〇〇〇 \sim 八〇〇〇個とすれば、明代中期には元代中期に比べ、タカラガイの対銀比価は三 \sim 四割程度に下落していたことになる⁽¹⁸⁾。

なお『万曆會計録』には、一五一七(正徳一二)年に雲南から徴収した租税の、税目・徴収手段・税額が列挙されている。そのうちタカラガイは「差発」が二三万五九七七索、商税が二九万四〇四六索、その他が二八四四索、計五三万

二八八七索であった¹²⁾。永樂年間におけるタカラガイの年間徴収額三三〇三四万索に比べると、この年の徴収額は約一・六倍に増加しているのである。

一六世紀前期には一五世紀前期に比べて、海陸の朝貢貿易を通じた雲南へのタカラガイの流入量は大きく減少した可能性が高い。それにもかかわらず、なぜ雲南ではタカラガイの対銀比価は大きく低下し、タカラガイによる納税額も増加したのだろうか。一つには密貿易を通じた移入が拡大した可能性も考えられるかもしれない。ただしそれ以上に、雲南で流通するタカラガイの種類が変化したことが主要な原因だったのではないか。その手がかりとなるのが、雲南の考古遺跡から出土したタカラガイの変化である。

元代にモルディブ産キイロダカラが基準貨幣（真贋）として広く流通した主要因は、その供給量が豊富であるとともに、他地域のタカラガイに比して小型かつ均一であり、輸送・交易・貯蓄に有利なためであった。実際に雲南で移入されたタカラガイの大きさを示す遺物として、雲南北東部の曲靖県八塔台で発掘された唐末～明初の一一二基の火葬墓からは、計六五三個のタカラガイが発掘されている。それらは殻長が一三ミリ前後、殻幅が一〇ミリ前後とかなり小型なキイロダカラであり、モルディブ産キイロダカラであった可能性が高い。一方、雲南北西部の大理市下河村で出土した明代のタカラガイは、殻長が約二四ミリ、殻幅が約一二ミリであり、八塔台出土の唐代～明初のタカラガイよりもかなり大きく、他地域産のキイロダカラやハナピラダカラだと考えられる。またシブソンパンナーの景洪県で発掘された明代の墳墓で出土した九〇枚強のタカラガイも、殻長二七ミリ前後のハナピラダカラであった¹³⁾。

限られた事例ではあるが、上記のデータは明初以前（八塔台）と明代中期以降（下河村・景洪県）の間に、雲南に移入されたタカラガイの中心が、モルディブ産キイロダカラから他地域産のハナピラダカラに変化した可能性をうかがわせる。すでに元代から、雲南には「真贋」たるモルディブ産キイロダカラだけではなく、他地域のタカラガイも流入し、「他贋」として減価使用され、階層的なタカラガイの流通秩序が成立していたと考えられる。一五世紀前期にも朝貢貿易や鄭和の遠征を通じてモルディブ産キイロダカラは流入しつづけ、階層的なタカラガイ流通秩序も維持されていたであ

ろう。

しかし一五世紀中期以降、南海諸国の朝貢貿易の縮小や、「三征麓川」によるビルマルートの朝貢貿易の衰退により、モルディブ産キイロダカラの移入量は大きく減少したと考えられる。おそらくこのころから、モルディブ産タカラガイの移入減少を補うために、南・東シナ海域産のハナビラダカラなどが大量に雲南に移入されるようになったのではない。結果として雲南では「真貳」たる小型のモルディブ産キイロダカラは退蔵されて流通過程から姿を消し、大型の「他貳」だけが残ることになる。これによつて雲南ではモルディブ産キイロダカラに代わり、他地域産のタカラガイが事実上の基準通貨となり、地域内の低額通貨として、交易手段・価値表示・価値保存の機能を果たすようになったと考えられるのである。

こうした明代雲南におけるタカラガイ流通秩序の変容は、一六世紀後半～一七世紀初頭の日本における「ビタ銭」の流通拡大と軌を一にする。一五世紀後半以降、日本では唐宋銭などが「精銭」（基準貨幣）となり、それ以外の「悪銭」を減価使用し、あるいは流通から排除する「撰銭」が広がり、価値表示は一般的に「精銭」により行われていた。しかし一六世紀後半までに、貨幣需要の増大にもかかわらず、基準銭であった唐宋銭や永楽銭の流通量不足が顕在化し、それを補うために国産私鑄銭（ビタ銭）が大量に生産・供給されるようになる。その結果、本来の基準銭たる唐宋銭は市場から退場して空位化し、価値表示単位としてのみ残ることになった。さらにビタ銭の流通が拡大すると、本来の基準銭は架空単位としても姿を消し、ビタ銭は事実上の基準銭として価値表示機能も果たすにいたる。ただし一七世紀中期以降は、公的な基準銭として寛永通宝が鑄造されビタ銭を駆逐していったのである⁽¹⁴⁾。

一六世紀後半の日本で私鑄銭（ビタ銭）が本来の基準銭の機能を代替したように、一五世紀の雲南では、「真貳」たるモルディブ産キイロダカラの基準貨幣機能を、本来は「他貳」であった他地域のタカラガイが代替したのだと考えられる。日本においても一六世紀末に米価表示手段が精銭からビタ銭に切り替わるとともに、銭立て米価が数倍に上昇しており⁽¹⁵⁾、同様の現象が一五世紀中期の雲南で、価値表示手段がモルディブ産キイロダカラ（真貳）から他地域のタカラ

ガイ(他賦)に変化したことで生じたのである。

なお一六世紀以降の雲南については、タカラガイの対銀比価を明記した一連の史料が残されており、一五二〇～四〇年代には銀一兩⇨タカラガイ七二〇〇個、一五九〇年代には銀一兩⇨タカラガイ七五四七個と、一六世紀を通じておおむね安定した比価が維持されている¹⁰⁶。タカラガイの比価が急落し、その流通秩序が崩壊していくのは、一七世紀以降のことであった¹⁰⁷。そして一五世紀中期を転機として、雲南へのモルデイブ産キイロダカラの流入が減少するなかで、雲南へのタカラガイ供給地としての重要性を高めたのが、琉球だったのである。

九 明代前期、琉球の朝貢貿易とタカラガイ

明代前期には朝貢・海禁政策のもとで、タカラガイもおもに朝貢貿易を通じて雲南に供給された。そのなかでも特に琉球王国の朝貢貿易が主要なタカラガイの供給ルートとなったことは、すでに上田信が『明実録』や『歴代宝案』などの文献史料にくわえ、那覇港の御物城や渡地村の発掘調査の成果も活用して明快に論じている¹⁰⁸。また最近では、楊斌も明代に琉球が雲南への主要なタカラガイ供給地になったことを指摘しているが、先行する上田の研究は参照していない¹⁰⁹。ここでは上田の研究成果に基づき、さらに関連する文献史料や考古学的成果をひろく参照して、明代前期の琉球産タカラガイの対明輸出の動向を検討してみたい。

一四世紀前中期の琉球列島では、福建と九州を結ぶ海上交易が成長するとともに、硫黄やタカラガイなどの生産や輸出も拡大していった。農耕や海外交易による富の蓄積により、琉球本島では有力首長の連合体として初期王権が成立していく。一四世紀末には中山・山南・山北王国が明朝との朝貢貿易を開始するが、一四三〇年ごろには中山が山北・山南を併合して、統一琉球王国が成立するにいたる。

琉球王国の進貢船による輸出品は、(1) 国王の進貢品(正貢品)、(2) 国王名義の附帯商品(附搭貨物)、(3) 使

節・乗員の附帯商品（自進物）の三つに大別される。（1）進貢品は、通常は琉球産の馬と硫黄であった⁽¹⁰⁾。洪武年間（二三六八〜九八）から、明軍は全土に大量の火器を配備しており、明代を通じて火薬原料としての硫黄の需要は高かった。また明初には軍馬としての馬の需要も大きく、明朝が琉球に使者を派遣して多量の馬や硫黄を買いつけることもあったが、一五世紀以降は明朝の馬匹調達体制が整備され、琉球馬の進貢は儀礼的性格が強くなっていったようである。また慶賀や謝恩などの特例の進貢に際しては、日本産の刀剣や工芸品、南海産の香料なども貢納されている⁽¹¹⁾。

一方、（2）国王名義の附帯商品は、一四五〇年代までは記録が乏しいが、南海産の蘇木と胡椒を附帯した記録が散見する。一四六〇年代以降は『歴代宝案』に附帯商品の品目と数量が明記されており、蘇木・胡椒のほか、時期によって南海産の錫・日本産の銅・琉球産の土夏布（苧麻布）も運ばれていたことが確認できる。附帯商品は原則的に明朝政府が買い上げて、南京の内庫に送付しており、明代前期には関税徴収（抽分）は免除されていた⁽¹²⁾。（3）使節・乗員の附帯商品については具体的な品目の記録は乏しいが、やはり原則的に政府が買い上げていたようである⁽¹³⁾。

それでは琉球産のタカラガイはどのような形で明朝に輸出されたのだろうか。まず国王の進貢品としては、一四三四（宣徳九）年に宣徳帝からの特例の賜与に対する謝恩として、日本産の屏風・扇子・刀剣や琉球産の硫黄などとともに、「螺殼」（ヤコウガイ）八五〇〇個、「海巴」（タカラガイ）五八八万個あまりを進貢した事例がある⁽¹⁴⁾。このほかには琉球国王の進貢品や附帯商品としてタカラガイが運ばれた記録は確認できない。ただし正徳『大明会典』（一五〇九〔正徳四〕年刊）では琉球の「貢物」として、馬・硫黄・蘇木・胡椒に続いて「螺殼」と「海巴」を挙げており⁽¹⁵⁾、明代前期にはこれ以外にも進貢品ないし附帯商品としてタカラガイが輸出されることがあった可能性もある。

また使者・乗員の自進物に関しては、『英宗実録』に一四三六（正統元）年三月に福建で生じた次のような事件が記録されている。

琉球国の使臣漫泰来結致等言う。「初め福建に到れる時、止だ国王の進貢せる方物のみ具して以て聞す。各人の附齎せる海螺殼九十・海巴五万八千あり。一時に自陳を失し、有司は以て漏報の数と為し、悉く送りて入官し、因りて

齎装たびじたくに乏し。懇乞すらくは価を給さんことを」。上は行在礼部に命じ、悉く例の如くこれを給せしむ¹⁶⁶。

琉球使節が福建に到来した際、国王の進貢品のみ申告し、各人が附帯したヤコウガイ九〇個・タカラガイ五八〇〇〇個は未申告であった。福建当局がそれらを申告漏れとしてすべて没収したため、琉球使節はその返還を懇願し、正統帝はそれを容認したのである。

さらに翌一四三七（正統二）年二月にも、浙江において次のような事件が生じている。

浙江省舶提挙司提挙王聰奏す。「琉球国中山王、遣使して朝貢す。その載す所の海巴・螺殻は亦た宜しく数を具して入官すべし」。上、礼部の臣に謂いて曰く。「海巴・螺殻は夷人資して以て貨殖す。これを取るも奚ぞ用いん。それ悉くこれを還し、仍お著なじて令と為せ」¹⁶⁶。

琉球の進貢船が浙江（寧波か温州）に來航した際、浙江省舶司は進貢船が附帯したタカラガイ・ヤコウガイを檢収して「入官」すべきだと上奏した。しかし正統帝は今回も琉球人が交易のために持参した商品を「入官」するには及ばないとして、返還を命じたのである。

ここでいう「入官」とは、弘治年間（一四八八〜一五〇五）の定例に、「凡そ番貨の進貢の内、国王・王妃及び使臣人等の附して至る貨物は、十分を以て率と為し、五分は入官し、五分は価値を給還す」とあるように¹⁶⁷、付帯商品の一部を関税として徴収（抽分）することを意味する。一五世紀中期の段階では国王の附帯商品は免税とされていたので、浙江省舶司は使節が自進物として持ちこんだタカラガイ・ヤコウガイを抽分することを求めたのであろう。正統帝はこれに対し、朝貢使節に対する恩恵として、それらの抽分免除を認めたわけである。前年の琉球使節が附帯したタカラガイなどを申告しなかったのも、おそらく市舶司における抽分を免れるためであろう。

また同年十月には戸部が上奏して、雲南では官員の俸給を一部は宝鈔で、一部はタカラガイや布帛類で支給するべきだとしたうえで、「今、南京庫には海肥あまた数多あり」として、南京の内庫から雲南にタカラガイを送って俸給に充てることを要請し、裁可された¹⁶⁸。この時期には南海諸国の朝貢貿易が縮小傾向にあったにもかかわらず、南京内庫におけるタ

カラガイのストックが増加しているのは、琉球の朝貢貿易による供給増大に起因するにちがいない。琉球使節が自進物として持ちこんだタカラガイも、国王の附帯商品と同様に、明朝政府が買い取って南京内庫に収めていたわけである。

その三年後、一四四〇（正統五）年にも戸部が上奏し、雲南では穀物の徴収額が不足しているため、官員の俸給米の一部を、南京内庫に貯蔵するタカラガイで代替支給してほしいと要請した。正統帝はこれに対し、南京内庫からタカラガイ五〇万斤（二九五トン）を支出し、雲南に送るように命じている⁽⁴⁹⁾。五〇万斤という膨大なタカラガイのなかには、南海諸国の朝貢使節の自進物も含まれるであろうが、特に数年前から琉球使節が大量のタカラガイを持ちこんでいることから見て、大半が琉球産であった可能性が高い⁽⁵⁰⁾。

ただし一四七五（成化一一）年には、明朝は琉球の朝貢を一年一回から二年一回に制限するとともに、国王の進貢品や附帯商品を除き、使節が私的に自進物を持ちこむことを禁じた⁽⁵¹⁾。これによって自進物としてのタカラガイ輸出は閉ざされ、その他に進貢品や国王の附帯商品としてタカラガイをもたらしたという記録もないので、琉球の進貢船によるタカラガイ輸出は大きく減少したと考えられる。

さらに一五世紀後期には、琉球ではタカラガイ資源の枯渇が生じていた可能性もある。山口正士によれば、現在の沖縄県内におけるサンゴ礁の礁原部分の総面積は約八万ヘクタールであり、タカラガイの棲息域をその一割低度、棲息密度を一平方メートル当たり一個体以上とすれば、タカラガイの現存数は八千万個体以上となる。かつての個体数は現在よりはるかに多かったと思われるが、組織的な大量採集が続けられれば、資源の枯渇は当然起こりえたという⁽⁵²⁾。上述のように、一四三四年には琉球国王が五八八万個という膨大なタカラガイを進貢している。また一四三六年にも琉球船の乗員が一人当たり五八〇〇〇個のタカラガイを自進物として積みこんでおり、二〇人が持ちこめば百万個以上に達する。このように琉球から連年のように百万個以上のタカラガイが輸出されたとすれば、乱獲による資源枯渇も避けがたかったであろう。

一五世紀後期には自進物の輸出禁止と乱獲による資源枯渇によって、琉球の朝貢貿易を通じたタカラガイ輸出は大き

く縮小したにちがいない。その一方、このころから海禁の弛緩にともない福建海商の琉球への密貿易は拡大しつつあった¹⁰⁹。また一五世紀段階では先島諸島には琉球王府の直接的支配は及んでおらず、タカラガイ資源の枯渇は沖縄諸島ほど深刻ではなかっただろう。おそらく一五世紀後期以降は、タカラガイは朝貢貿易よりも、むしろ琉球、特に先島に來航する福建海商の密貿易を通じて、中国に供給されたのではないだろうか。

一〇 考古学から見る琉球王国のタカラガイ輸出

一五世紀に琉球王国が朝貢貿易を通じて大量のタカラガイを輸出していたことは、すでに上田信が指摘するように、文献史料だけではなく、那覇港の渡地村や御物城などから大量のタカラガイが出土していることから裏付けられる。ここでも上田の研究を受けて、渡地村などの調査報告書をあらためて検証し、琉球のタカラガイ輸出の実態をさらに論じることにはしたい。

琉球のタカラガイ貿易に関する考古学的研究の先蹤は、一九七七年に新田重清らが琉球王府の貿易品倉庫であった那覇港内の御物城で行った発掘調査である。新田らが米軍管理下にあった御物城の一角を試掘したところ、一五世紀ごろの多数の青磁とともに、輸出用に保管されていたと思われる、未加工のタカラガイが大量に出土したのである¹¹⁰。

さらに二〇一一年に那覇市教育委員会によって行われた、御物城に相對する那覇港の荷揚げ場であった渡地村跡の発掘調査では、やはり大量の青磁とともに多数のタカラガイが出土した。調査報告書によれば、遺跡の層序は地表面の第Ⅰ層、戦中・戦後期の第Ⅱ層、近世期の第Ⅲ層、一五世紀後半～一六世紀前半ごろの第Ⅳ層、一四世紀後半～一五世紀前半ごろの第Ⅴ層、および渡地村が造成された一四世紀後半ごろの第Ⅵ・Ⅶ層からなる¹¹¹。

このうち第Ⅴ層には六か所の青磁集中部があり、計六〇一三点の青磁片が出土し、うち三八七七点が一四世紀後半～一五世紀初期の外反口縁碗であった。また第Ⅳ層にも二か所の青磁集中部があり、集中部以外でも多数の青磁が出土す

【表3】 渡地村跡の層序別タカラガイ出土数

	第Ⅱ層	第Ⅲ層	第Ⅳ層	第Ⅴ層	第Ⅵ層	第Ⅶ層	その他	合計
ハナビラダカラ	34	239	407	3855	368	212	47	5162
ハナマルユキ	40	230	213	1043	136	55	27	1744
キイロダカラ	5	27	27	497	30	20	3	609

*『渡地村跡』（那覇市教育委員会、2012年）308頁、第56表により作成。「その他」は攪乱層と層序不明。

る。第Ⅳ層を中心に一五世紀末～一六世紀前半の青磁片が計五四七七点出土し、うち五〇四一点が細蓮弁文碗であった¹⁶⁾。

さらに第Ⅳ層には二か所のタカラガイ集中部があり、宮古式土器や褐釉陶器も相伴している。また第Ⅴ層には三か所、第Ⅵ・Ⅶ層にも各一か所のタカラガイ集中部が残されていた¹⁶⁾。タカラガイの出土総数は八〇一八個に上り、ハナビラダカラ・ハナマルユキ・キイロダカラの三種が全体の九四％近くを占める。各層における上記三種の出土数は【表3】のようになる。

全体としてはハナビラダカラが五一六二個とタカラガイ総数の約六四％を占め、ハナマルユキが一七四四個（約二二％）、キイロダカラが六〇九個（約七・六％）と続く。また層序別では、第Ⅴ層（一四世紀末～一五世紀前半）が三種合計で五三九五個と突出して多く、第Ⅳ層（一五世紀後半～一六世紀前半）が六四七個、第Ⅵ層（一四世紀代）が五三四個となる。

通時的には渡地村造成期の一四世紀後半（第Ⅶ・Ⅵ層）から漸増し、一四世紀末～一五世紀前半（第Ⅴ層）に大きなピークを迎え、一五世紀後半（第Ⅳ層）から近世（第Ⅲ層）にかけて減少するという趨勢を示す¹⁶⁾。一四世紀末～一五世紀前半は朝貢貿易の最盛期であり、進貢船を通じて大量のタカラガイが輸出され、その代価として無文外反碗の青磁などが多数輸入されていたことが確認できる。一五世紀後半～一六世紀前半にはタカラガイの出土数は減少するが、細蓮弁文碗などの青磁は依然として大量に出土する。

瀬戸哲也は古琉球期における陶磁器の出土状況を七期に区分している¹⁶⁾。それによれば渡地村を含む那覇港全体で出土した中国陶磁の個体数は、4期（一四世紀後半～一五世紀初期）から5期（一五世紀前半～後半）にかけて漸増し、6期（一五世紀末～一六世紀前半）に急増している【図6】（二四頁）。6期には朝貢貿易が縮小傾向に入り、進貢船によるタカラガイ輸出

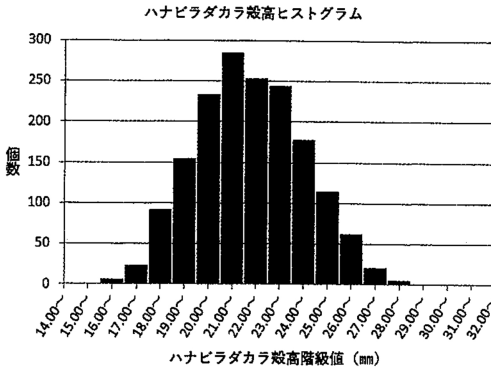


図7 千原遺跡出土ハナビラダカラの殻高ヒストグラム

〔千原遺跡〕 p.115, 第65図)

も急減するが、陶磁出土数はピークを迎えているのである。このことは一五世紀後期以降も、朝貢貿易の枠外で華人商船や琉球船による非公式貿易が成長し、那覇港における海外貿易はなお拡大局面にあったことを示している⁽¹⁰⁾。

現時点では那覇港におけるタカラガイの出土は渡地村跡に集中しており、他の遺跡での出土数は多くない。たとえば渡地村の北側に隣接する那覇港の東村跡^{あがむら}では、やはり多数の中国陶磁が出土するが、タカラガイはおもに一五世紀中期～一七世紀初期の層位から、ハナマルユキ九七個、ハナビラダカラ六二個、キイロダカラ九個などが出土するにすぎず、数量的に輸用とは考えにくい⁽¹⁰⁾。また北部の今帰仁城跡本丸の一部からも、おもに一三世紀末の層位からハナマルユキ四六七個、ハナビラダカラ四七個、キイロダカラ五個が出土しているが、やはり数量的に輸用ではなかったようだ⁽¹⁰⁾。

ただし例外的に、那覇港の東北約一五キロに位置する北谷町の千原遺跡^{せんばら}では、タカラガイの集積遺構が残されている。この集積以降は近世期に形成された第三層で検出されたが、第三層からは一五世紀前中期の龍泉窯系青磁や、一四世紀後半以降のビロークスタイプⅢ類の白磁が多数出土しており、近世期の集落造成時の攪乱によって混入したものと思われる⁽¹⁰⁾。おそらく第三層出土のタカラガイも、一五世紀中期以前に集積されたものが、近世期に混入したものであろう。

第三層のタカラガイ集積遺構からは、ハナビラダカラ一六七四個（全体の八九・九％）、ハナマルユキ一四四個（七・七％）、キイロダカラ四一個（二・二％）が出土した。これらのタカラガイについては、黒住耐二が網羅的な計測データをまとめており、ハナビラダカラとハナマルユキについては、殻高（殻長）のヒストグラムを図表化している【図7】。これによれば、ハナビラダカラの殻高は一六～二八ミリに分布し、最頻

値は二一ミリであつた⁽⁶⁵⁾。またキイロダカラの殻高は一・四四ミリ〜二〇・二五ミリに分布し、平均値は二〇・七六ミリであつた⁽⁶⁶⁾。

海域アジアにおいて一般的に貝貨として流通したのは、キイロダカラとハナビラダカラの二種であつた。第六節で述べたように、モルデイブ産キイロダカラの平均殻長は一〇・五〜一六・〇ミリであり、他地域産よりも小型で均質なことが、世界各地で貝貨としてひろく用いられる重要な要因となつていた。一方、琉球産キイロダカラの最小殻長は一五・〇ミリであり、モルデイブ以外の諸地域のキイロダカラと比べると小さい。

沖繩列島ではハナビラダカラのほうがキイロダカラよりも多く、渡地村跡や千原遺跡の出土状況から見ても、明朝に輸出されたタカラガイも大部分がハナビラダカラであつた。前節で述べたように、雲南では一五世紀中期までに、モルデイブ産キイロダカラの流入減少により、より大きめの他地域のタカラガイが事実上の標準貝貨となつていたようである。千原遺跡におけるハナビラダカラの殻長最頻値二一・〇ミリは、雲南下河村で出土した明代のタカラガイの殻長二四ミリや、シブソパンナーの景洪県で出土した明代のハナビラダカラの殻長二七ミリよりもかなり小さく、タイ産キイロダカラの最小殻長二三ミリも下回る。

琉球産のハナビラダカラは、おそらく元代から福建を通じて雲南に供給され、「真贋」（モルデイブ産キイロダカラ）に対する「他贋」として流通していたと思われる。そして一五世紀中期に雲南へのモルデイブ産キイロダカラの供給が減少すると、琉球産ハナビラダカラは他地域産より小型で、かつ供給量が潤沢だったために、「真贋」に準ずる貝貨としてひろく流通するようになったのであろう。

また千原遺跡附近の伊礼原^{いれはら}D遺跡でも、グスク時代にハナビラダカラやハナマルユキの出土数が増加しており、やはり交易用に採集された可能性があるという⁽⁶⁷⁾。黒住耐二は各集落で採集されたタカラガイが、王府の命により各間切で集積され、そこから最終集積地である渡地村に送られたと想定し、千原遺跡のタカラガイ集積遺構が各間切でのタカラガイ収集と関連する可能性を指摘している⁽⁶⁸⁾。

なおタカラガイ集積遺構を含む第三層からは、特に一四世紀後半以降の白磁や一五世紀前中期の龍泉窯系青磁が多数出土しており^⑧、千原遺跡におけるタカラガイ集積も、渡地村跡と同じく一四世紀末～一五世紀前半にピークがあったと思われる。そしてこの時期は、琉球三王国による朝貢貿易が開始されてから、一四七五年に進貢船の使節・乗員による自進物輸出が禁じられるまでの期間におおむね重なるのである。渡地村跡や千原遺跡におけるタカラガイ集積遺構は、この時期に各間切で採集されたタカラガイが渡地村に送られ、おもに進貢船の使節自進物として大量に輸出されていたことを示すものといえる。

渡地村跡では一五世紀後半～一六世紀前半の層位からもタカラガイは出土するが、数量は一四世紀末～一五世紀前半の一二％ほどに急減しており^⑨、一四七五年に自進物の持ち込みが禁止されたことに加え、乱獲による資源枯渇も相まって、一五世紀後期には那覇からのタカラガイ輸出は大きく縮小したことを示唆している。

一一 明代のタカラガイ輸出と陶磁貿易

第五節で論じたように、元代に先島・沖縄諸島に流入した今帰仁・ピロースクタイプの福建産粗製白磁は、タカラガイや硫黄などを求めて来航した福建海商がもたらしたものと考えられる。ただし一四世紀後期以降、先島・沖縄産のタカラガイはおもに琉球三王国の朝貢貿易を通じて明朝に運ばれるようになる。こうした貿易ルートの変化は、中国陶磁の流入動向とどのように関わっているのだろうか。

宮城弘樹によれば、今帰仁タイプとピロースクタイプⅠ・Ⅱ類は、先島（宮古・八重山）諸島で沖縄諸島の半数前後が出土しており【表4】、先島では出土白磁の大部分を、沖縄では

【表4】今帰仁・ピロースクタイプ地域別出土点数

出土点数	今帰仁タイプ	ピロースクタイプⅠ	ピロースクタイプⅡ	ピロースクタイプⅢ
奄美諸島	0	1	3	21
沖縄諸島	114	56	338	2,002
宮古諸島	12	8	30	20
八重山諸島	51	16	123	111

(宮城弘樹「琉球王国とグスクの考古学」p.116, 表4)

三割強を占める⁽¹⁰⁾。ところが一四世紀中期以降に流入したビロースクタイプⅢ類は、沖繩ではⅡ類の六倍近く出土するのに対し、先島では沖繩のわずか六・五%にすぎない。このことは一四世紀後期以降、それまで福建白磁を直接に先島にもたらしていた、泉州―先島間の海上貿易が大きく縮小したことを示唆している。

先島諸島における貿易陶磁の出土状況については、最近では村木二郎らの国立歴史民俗博物館の研究グループが、古島・石垣島などの代表的な集落遺跡において網羅的な調査検討を行っている⁽¹¹⁾。それに基づく池谷初恵の論考によれば、宮古島西岸、現在の平良市街地に位置する住屋遺跡では、Ⅲ期（一三世紀後半～一四世紀前半）に陶磁出土数が増加し、今帰仁タイプやビロースクタイプⅡ類などの白磁が八割を占めるが、Ⅳa期（一四世紀後半～一五世紀初頭）には青磁と白磁が逆転し、青磁が九割近くに達する。Ⅳb期（一五世紀前期～中期）にはさらに出土数が急増し、Ⅴ期（一五世紀後半～一六世紀前半）にピークを迎える。Ⅳb期には青磁が九五%にのぼり、Ⅴ期にも青磁が八割を占めるが、青花も一五%含まれる【図8a】⁽¹²⁾。

一方、宮古島西南岸のミヌズマ遺跡でも、Ⅲ期には陶磁出土数が急増し、かつ白磁が一〇〇%近いが、Ⅳa期にはやはり青磁が白磁を逆転し九六%を占める。ただしⅣb期には一転して出土数が激減し、Ⅴ期にはほぼ途絶している【図8b】。また石垣島南西部のフルスト原遺跡では、やはりⅢ期に出土数が急増し、その大部分が白磁であるが、Ⅲ期とⅣa期の間に白磁と青磁の逆転現象が生じ、特にⅣa期には出土数が大きく増加してピークを迎える【図8c】⁽¹³⁾。三つの遺跡ではいずれも一三世紀後半から白磁出土数が急増しており、このことから福建―先島交易が拡大したことを示すが、一四世紀後半には、いずれも白磁と青磁の逆転現象が生じているのである⁽¹⁴⁾。

また久貝弥嗣も村木らの共同研究に先立ち、宮古島東部の高越城趾において、一四世紀前半～後半にかけて白磁と青磁の逆転現象が生じたことを指摘している。久貝はその原因として、一四世紀前半までは福建―先島貿易によって福建産白磁が直接的に宮古島に流入していたが、一四世紀後期には明朝の海禁によって福建―先島間の交易活動が衰退し、福州―那覇―宮古島ルートによって、おもに青磁が流入するようになったと推定する⁽¹⁵⁾。

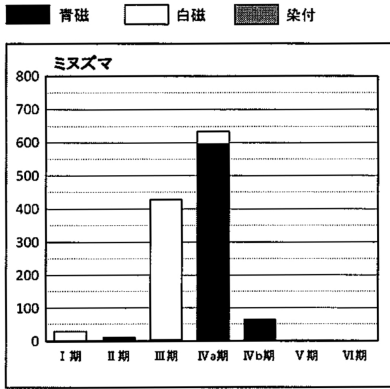


図8b ミスズマ遺跡出土の貿易磁器数

(池谷前掲論文 p.145, 図1)

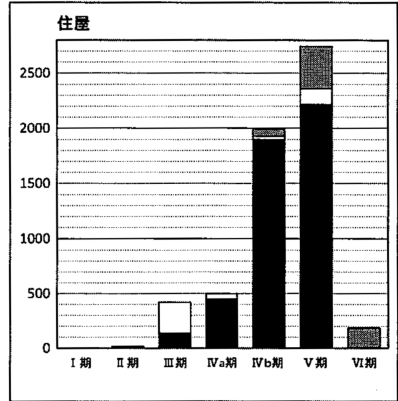


図8a 住屋遺跡出土の貿易磁器数

(池谷初恵「先島諸島における貿易陶磁の動態とムラの成立に関する課題」p.145, 図1)

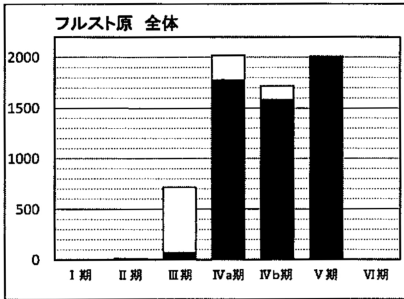


図8c フルスト原遺跡出土の貿易磁器数

(池谷前掲論文 p.150, 図5)

筆者もまた一四世紀後期の先島における白磁と青磁の逆転現象は、福建と先島・沖縄を結ぶ貿易ルートの変化に起因すると考える。一三世紀末ごろから、雲南におけるタカラガイ需要の増加に対応して、福建海南がタカラガイなどを求めておもに泉州から先島に渡航しはじめた。彼らはその代価として、莆田寮白磁の輸出急増により東南アジア市場でのシェアを失いつつあった浦口寮・閩清寮の白磁（今帰仁タイプ、ピロースタタイプⅠ・Ⅱ類）や、泉州磁窰窯

の褐釉陶器壺（スビガミ）を先島にもたらした。一方、福建海商は沖繩諸島にも硫黄やタカラガイなどを求めて渡航し、龍泉窯青磁や浦口窯・閩清窯を含む福建白磁をもたらしたのである。

しかし明朝の成立によって状況は一変する。洪武帝は一三七四（洪武七）年に海禁令を強化し、対外通商を朝貢貿易に限定した⁽¹⁶⁾。これによって泉州からタカラガイを求めて先島に来航する福建海商も激減したにちがいない。その後は中国―琉球間の合法的な貿易ルートは、琉球三王国の朝貢貿易に限定され、一四世紀末にはその拠点港として那覇港が急速かつ大規模に整備された⁽¹⁷⁾。この時期に荷揚げ場として造成されたと思われる渡地村跡では、岩礁面に接する最初期の層位（第VII層）からタカラガイ集中部が検出され、青磁集中部はその上の層位（第VI層）から出現しており、渡地村が造成された最初期から、タカラガイが主要輸出品として集積されていたことを示す。

福建海商による泉州―先島間のタカラガイ交易がほぼ途絶するとともに、その代価であった今帰仁・ビロースクタイプの先島への流入も激減した。一四世紀末以降は、先島産のタカラガイはおもに那覇港に運ばれ、沖繩諸島産のタカラガイとともに、進貢船によって泉州・福州などに輸出され、その代価として龍泉窯青磁やビロークスタイプⅢ類の白磁などが那覇港に輸入されたと考えられる。先島ではこの時期に龍泉窯青磁の出土数が急増し、泉州産のスビガミも継続的に出土するが、白磁の出土数は急減しており、那覇から先島へはタカラガイなどの代価として、青磁とスビガミが選択的に運ばれたようである⁽¹⁸⁾。

また近世に編纂された琉球王国の公定史書や宮古島の旧記には、一三九〇（洪武二三）年に与那覇勢頭豊見親が宮古島北東部の白川浜から船出し、はじめて中山王国に朝貢したと伝えている⁽¹⁹⁾。与那覇勢頭豊見親の実像は明らかではないが、一四世紀末には宮古島の有力首長の一部が中山と通交を開いたことは確かであろう。ただしこの伝承が伝えているのは、あくまで中山王権との通交開始であり、宮古島の首長層はそれ以前から、距離的により近い山南王権と通交を行っていた可能性がある。宮古島産のタカラガイは中山・山南双方の朝貢貿易を通じて明朝に輸出され、その代価として龍泉窯青磁などが那覇を経て先島に流入したのではないか。

なお一四〇四（永楽二）年には明朝の礼部が永楽帝に対し、「琉球国山南王、遣使して方物を貢すに、就ち白金を齎して処州に詣りて磁器を市わしむ」と上言し、禁令違反として処罰を求めている。山南王国の朝貢使節が、龍泉窯が位置する浙江処州府にも人員を派遣して直接に磁器を買いつけていたのである。ただし永楽帝は「遠方の人、利を求むるを知るのみ、安んぞ禁令を知らんや」と述べ、この事件を不問に処したという⁽¹⁸⁾。

山南王国は直接に龍泉まで人員を派遣して青磁を入手したのであり、それらの龍泉窯青磁の一部は、タカラガイなどの対価として先島にも供給されたにちがいない。山南王国は一三八〇〜一四二四（洪武一三〜永楽二二）年に計三〇回の朝貢を行っており、同時期の中山の六九回に次ぎ、山北の一七回よりも多い⁽¹⁹⁾。中山・山北に比べて領域が狭小で特産物も乏しい山南が、比較的多くの朝貢貿易を行うことができた要因の一つには、先島との密接な交易関係があったのではないか。

第三節で論じたように、一四世紀初頭には宮古島東岸の保良地域（婆羅公）の諸集落が、共同で琉球本島南部の佐敷（撒里即）に商船を派遣していたと考えられる。宮古島民はその後も佐敷などの山南地域の諸港に渡航し、交易を行っていたにちがいない。第一尚氏王朝を開いた尚巴志はもともと佐敷グスクの按司であり、佐敷グスク直下の馬天港は、本島南部の主要港の一つであった⁽²⁰⁾。村井章介は尚巴志がこの馬天港を把握していたことが、彼が勢力を拡大し中山王権を奪うにいたる起点となったと推定している⁽²¹⁾。

佐敷グスク（佐敷上グスク）は馬天港南東の丘陵台地に位置し、一四〜一五世紀に盛期を迎えており、馬天港北方の与那原港にも近い⁽²²⁾。蔡温『中山世譜』によれば、尚巴志は与那原に入港した異国の商船から大量の鉄塊を購入し、民衆に分配して農器を造らせ人望を得たという⁽²³⁾。この逸話は尚巴志が与那原港や馬天港において、奄美経由で運ばれた日本産の鉄や、先島経由で運ばれた福建産の鉄などの交易を進め、勢力を拡大したことを示唆している。

『中山世譜』では、尚巴志は一三九二（洪武二五）年に佐敷按司となったのち、西方の島添大里グスクを攻略し、一四〇六（永楽四）年には中山王武寧を滅ぼして父尚思紹を中山王としたと伝える⁽²⁴⁾。島添大里グスクは饒波川の最上流部

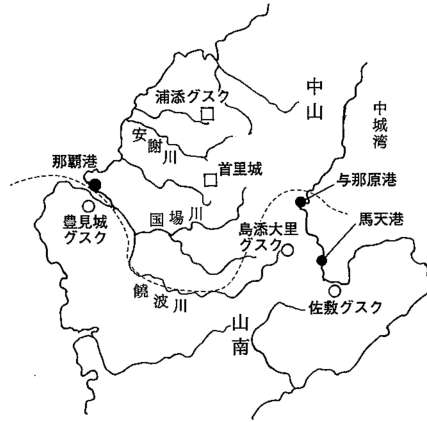


図9 沖縄本島中部の主要グスクと港湾

一三 明代のタカラガイ交易と先島・沖縄

一四世紀末以降、海禁政策により福建海商の先島来航は途絶するが、朝貢貿易の拡大により、那覇経由の先島のタカラガイ輸出はさらに増加し、その代価として龍泉窯青磁などが先島に流入したと考えられる。これによって宮古島・石垣島の主要集落遺跡では、一四世紀後半〜一五世紀初期に磁器出土数が増加するとともに、白磁と青磁の逆転現象が生じており、同様の状況は、宮古・八重山諸島各地の集落遺跡でほぼ例外なく確認できる。

しかしその後、先島各地の集落遺跡における磁器出土状況は大きく分岐する。住屋遺跡では、出土数がIVb期（一五世紀前期〜中期）にさらに急増し、V期（一五世紀後半〜一六世紀前半）にピークを迎える。VI期（一六世紀中期〜後

に位置し、尚巴志はそこから饒波川河口部の那覇方面に勢力を拡大し、那覇の支配をめぐって浦添グスクの中山王武寧と争ったのち、最終的には武寧を倒して中山王位を奪ったのであろう【図9】。

当時すでに宮古島と中山王国の間には十数年にわたって通交が行われており、渡地村のタカラガイ・青磁集中部の存在が示すように、宮古島からは那覇港に大量のタカラガイが送られ、その代価として青磁が那覇港から宮古島に運ばれていた。那覇港は中山と山南の境界部に位置しており、山南の使者が龍泉窯に赴いて磁器を調達したことが示すように、一五世紀初頭までは山南王国も那覇港の華人海商と結んで、先島とのタカラガイ・青磁交易を推進していたにちがいない。

期)には磁器出土数が急減するが、これは琉球全体に共通する海外貿易の衰退の結果であり、住屋遺跡自体は近世まで宮古島の中心地として存続している【図8a】。一方、ミヌズマ遺跡ではIVa期に出土数がピークを迎えるが、IVb期には激減し、V期にはほぼ途絶しており、一五世紀前期ごろに集落が廃絶したと考えられる【図8b】⁽⁹⁷⁾。ミヌズマ遺跡以外にも、宮古島では多くの遺跡で一五世紀前期を最後に陶磁出土がほぼ途絶しており、この時期に各地の集落が共時的に廃絶したようである⁽⁹⁸⁾。

久貝弥嗣は古琉球期における宮古島の集落遺跡を、存続時期によって三つのタイプに区分している(1)「住屋タイプ」は一三世紀以前から一六世紀以降まで存続する遺跡であり、住屋遺跡をはじめ西岸の平良市街地一帯に集中する。(2)「高腰タイプ」は一三世紀以前に出現し、一三世紀後半〜一五世紀前半に盛期を迎えるが、一五世紀中期までに断絶する遺跡である。高腰城趾のように東岸部の丘陵上に立地し、石積遺構をもち防御性が強い遺跡が多いが、ミヌズマ遺跡のように沿岸低地に立地する場合もある。(3)元島タイプは一五世紀中期以降に盛期がある遺跡であり、おもに沿岸低地に立地している⁽⁹⁹⁾。

久貝はこうした集落の消長に関連して、宮古島の古記録や民間伝承に残された、「与那覇原軍」の伝承に注目している⁽¹⁰⁰⁾。それによれば、宮古島にはもともと「西の百郡、東の百郡」と言われるほど多くの集落があった。しかしその後、現在の平良東方に佐多大人を首領とする「与那覇原」という勢力が台頭し、ほとんどの集落を攻め滅ぼしてしまった。しかし最後に、やはり平良を拠点とする目黒盛見親が与那覇原を打ち破り、争乱を平定したという。一五世紀末に琉球王府と結んで宮古島の島主となった仲宗根豊見親は、目黒盛の玄孫とされている⁽¹⁰¹⁾。

古記録や伝承では、「与那覇原軍」が起こった時代は明示されていない⁽¹⁰²⁾。ただし上述のように、一五世紀前期の宮古島では「高腰タイプ」の多くの集落遺跡が共時的に廃絶しており、そのなかには高越城・大嶽城・大浦多志・ミヌズマなど、与那覇原軍に滅ぼされたという伝承を持つものもある⁽¹⁰³⁾。久貝も推定するように、一四世紀末に海禁令により福建―先島間の海上貿易が衰退し、他方で那覇―福建間の朝貢貿易が成長するにともない、宮古島における海上貿易の

中心は東岸の白川浜などから、那覇との交易拠点であった西岸の漲水浜はりすに移ったようである。一五世紀前期には、漲水浜を拠点とする新興勢力に圧倒され、東岸・南岸の諸集落の多くは廃絶し、それにとまなう動乱が、「与那覇原軍」として伝承されたのだと考えられる⁽⁹⁵⁾。

一四世紀末から、先島産のタカラガイは中山・山南王国の朝貢貿易を通じて明朝に供給された。蔡温『中山世譜』では一三九〇年の先島の通貢開始について、「是より先、中山漸く衰う。宮古・八重山の臣服して自り以後、国勢は始めて強し」と伝えている⁽⁹⁶⁾。後世の史料ではあるが、それまで山南が主導していた先島との交易に中山が参入したことが、中山の勢力拡大に寄与したことは確かであろう。山南王国は一三八〇（洪武一三）年から朝貢貿易を始めているが、王権は安定せず中山に従属的な立場にあつたとされる。一四一〇年代後半には山南王国は中山の傀儡政権と化して、一四二九（宣徳四）年を最後に朝貢も途絶し、ほどなく中山に併合されたようである⁽⁹⁶⁾。

宮古島において西岸の住屋遺跡などを除き、多くの集落が同時期に廃絶した一五世紀前期は、中山王権が山南を傀儡化し、ついで併合した時期にあたる。この時期に中山が山南を併合したのと連動して、中山王権と結びついた西岸の新興勢力が、山南との関係が強かった東岸などの既存集落を制圧して全島の交易利権を掌握し、交易利権を喪失した諸集落は廃絶に向かったのではないだろうか。こうした争乱の記憶が、「与那覇原軍」として後世に語り継がれたのだと思われる。

しかしその後、漲水浜勢力の間でも対立が生じ、最終的に目黒盛豊見親が与那覇原勢力を倒して勝ち残った。目黒盛の本拠地は漲水浜に臨む住屋遺跡附近だったとされ⁽⁹⁷⁾、一五世紀前中期以降、住屋遺跡における陶磁出土量が激増し、その他の集落における出土が途絶するのは、そこを拠点とする勢力が、中山との間のタカラガイ輸出と陶磁輸入をほぼ完全に独占したことを如実に示す。中山王国はこうして漲水浜勢力との交易を通じて宮古島などのタカラガイを入手するとともに、北谷遺跡の集積遺構が示すように、沖縄本島の各間切にもタカラガイの貢納を課した。こうして先島・沖縄諸島から調達されたタカラガイは、最終集積地たる渡地村へと運ばれ、琉球の進貢船によって輸出されたわけである。

しかし一四七五年には琉球使節の自進物持ちこみが禁止され、乱獲によるタカラガイ資源の枯渇も相まって、朝貢貿易を通じたタカラガイ輸出は大きく減少した。その一方、一五世紀後期には海禁の弛緩にともない、福建海商による琉球への密貿易は拡大の一途にあった。彼らはとりわけ琉球王府の直接的支配が及ばず、タカラガイ資源の枯渇も沖縄諸島ほど深刻ではなかった先島諸島に渡航して、タカラガイを調達したと思われる。第一節で述べたように、海水温が高い先島諸島産のハナビラダカラは沖縄諸島産よりも小型であり、輸送コストが低く交易や保存にも適していたので、雲南での需要も高かったにちがいない。特に八重山諸島は一五世紀を通じて琉球王府と直接的な通交を行っておらず、福建との距離が近いこともあり、早い時期から福建海商が来航して密貿易を行っていたであろう。

一五世紀後半における福建―八重山間の海上貿易の実態を伝える貴重な考古資料として、石垣島西岸、名蔵湾のシタダル海底遺跡で出土した大量の陶磁器がある。この遺跡を最初に紹介した大瀨永亘は、これらの陶磁は朝貢貿易ではなく、先島に來航した福建海商の密貿易によって運ばれたと推定した¹⁹⁾。さらに関口広次は、大瀨がこの遺跡で収集した計三四六一個体の陶磁を網羅的に整理検討している。それによれば、青磁は二八四五個体にのぼり、一五世紀後半に龍泉中心部の大窯や周辺部の竹口窯などで生産されたと推定される。白磁は四四〇個体を数え、一五世紀後半の福建北部の邵武窯の産品であった。このほかに青花が六九片、鉄釉（褐釉陶器壺、スピガミ）も一八九片を数える。これらの陶磁は大部分が粗製品であり、福建から八重山に來航し、名蔵湾で沈没した密貿易船の積荷だと考えられる¹⁹⁾。

関口は福建海商がこれらの陶磁の代価として求めた産品について、土夏布（苧麻布）を想定しているが、八重山産のタカラガイも主要な代価であったことは疑いない。一五世紀以降、福建海商の琉球密貿易の拠点となったのは、福建南部の漳州湾地域であった。漳州湾地域では海禁が厳しかった一五世紀前期から、すでに琉球との密貿易が行われており²⁰⁾、それによって八重山産のタカラガイも運ばれていたであろう。さらに一五世紀後期以降、海禁の弛緩により漳州湾―琉球間の密貿易はさらに拡大し²⁰⁾、同時に那覇―福州間の朝貢貿易によるタカラガイ輸入が急減したことにより、福建海商による八重山産タカラガイと中国陶磁などの密貿易も大きく増加したにちがいない。

先島諸島のなかでも、宮古島では多くの集落遺跡が一五世紀前期に共時的に廃絶するのに対し、八重山諸島の集落遺跡の動向にはタイムラグがある。村木二郎らによる悉皆調査によれば、石垣島南岸のフルスト原遺跡では、琉球三王国の朝貢貿易が始まったIV a期（一四世紀後半～一五世紀初頭）に陶磁出土数が第一のピークに達するとともに、白磁と青磁の逆転現象が起こるが、宮古島の多くの遺跡で出土数が激減したIV b期（一五世紀前中期）にも、フルスト原遺跡では出土数は微減に止まる。

つづくV期（一五世紀後半～一六世紀前半）には出土数が第二のピークに達するが、VI期（一六世紀中後期）には突然出土がほぼ途絶する。また第V期の出土陶磁は青磁がほぼすべてを占め、宮古島の住屋遺跡では三八〇点出土する青花はわずかに三しかない【図8c】。琉球でも一六世紀に出土数が増加する青花の出土がごく少ないことから、フルスト原遺跡は一六世紀の早い時期に廃絶した可能性が高い⁽²⁰⁾。八重山諸島ではフルスト原遺跡以外にも、石垣島・竹富島・黒島・新城島・西表島・鳩間島・波照間島・与那国島などで、一五世紀後半までは多くの陶磁が出土するが、一六世紀前半に出土数が激減し、この時期に廃絶したと見られる集落遺跡が多い⁽²⁰⁾。

一五世紀後期に石垣島南部を拠点として、八重山諸島に勢力を拡大したのがオヤケアカハチであり、フルスト原遺跡は彼の本拠地だったとされる。関口広次も説くように、アカハチはフルスト原遺跡を拠点として、八重山における福建海商との密貿易を掌握して勢力を拡大したのだと考えられる⁽²⁰⁾。しかしアカハチはこの交易利権をめぐって、宮古島の漲水浜を拠点とする仲宗根豊見親（目黒盛豊見親の玄孫）、その背後にある琉球王権と対立し、一五〇〇（弘治一三）年には尚真王が仲宗根豊見親を先導に軍船一〇〇隻を派遣してアカハチを滅ぼし、八重山を制圧した。アカハチの滅亡とともに、彼の本拠であったフルスト原遺跡も廃絶したわけである⁽²⁰⁾。

これに対し、仲宗根豊見親の本拠であった住屋遺跡では、第V期に二七〇〇点以上の陶磁が出土してピークを迎えており、琉球王権と結びついてアカハチの勢力を排除した宮古島西岸勢力が、八重山諸島も含む先島全域の陶磁交易への影響力を拡大したことをうかがわせる。アカハチの滅亡後、先島の支配は宮古島の仲宗根豊見親を中心とする勢力に委

ねられ、先島各地の貢納品が宮古島に集められ、那覇に設けられた宮古蔵に運ばれる体制が整えられた²⁸⁵。それまではアカハチのような現地勢力が、琉球王府の統制外で名蔵灣などに来航した福建海商との交易を主導していたと思われるが、一六世紀には琉球王府が宮古島勢力を通じて、先島における福建海商との交易にも統制を及ぼすようになっていく。先島諸島産のタカラガイも、こうした体制のもとで福建海商に提供され、中国陶磁などと交易されたのだと考えられる。

おわりに

本稿では上田信の研究成果を受けて、元明中国と琉球王国の文献史料、および考古学的研究の双方を総合的に利用し、雲南におけるタカラガイの供給・流通と、先島・沖縄諸島におけるタカラガイの生産・輸出の連関とその動向を検討してきた。もともとアフロ・ユーラシア各地で貝貨としてひろく流通していたのは、生産量がきわめて豊富で、小型かつ均一で貝貨として適していたモルディブ産キイロダカラであった。一方、先島・沖縄諸島でも比較的小型のハナピラダカラを大量に産出し、元明時代には東アジアにおける主要なタカラガイの供給地となっていたのである。

一三〜一四世紀の雲南では、モルディブ産キイロダカラがビルマ・シャムルートや、泉州経由の江南ルートなどを通じて流入し、「真贋」すなわち標準貨幣として流通していた。しかしそれだけでは貨幣需要の増大に対応できず、他地域産のタカラガイも流入し、「他贋」として減額使用されていたと考えられる。一方、一三一七年には宮古島民が浙江温州近海に漂着しており、彼らは宮古島東岸の保良地域の住民で、その目的地であった「撒里即」は、沖縄本島南部の佐敷を指すと推定しうる。また彼らが泉州から便船によつて送還されていることは、一四世紀初頭までに泉州―先島間で恒常的な海上交易が行われていたことを示している。

一三世紀後半から、先島・沖縄諸島には今帰仁・ピロースクタイプの福建産粗製白磁が流入しはじめる。当時の福建海商は、泉州から台湾に渡航して龍泉窯青磁や粗製白磁を輸出しており、彼らがさらに先島・沖縄まで交易圏を広げ、

粗製白磁や褐釉陶器壺などをもたらしたのである。福建海商は陶磁器や鉄製品などを先島・沖縄にもたらし、先島ではおもにタカラガイを入手し、沖縄でも硫黄島産の硫黄とともにタカラガイを調達したと考えられる。

雲南は一四世紀末に明朝の支配下に入るが、その後もタカラガイが地域内の低額貨幣として、交易手段・価値表示・価値保存のためにひろく使用されていた。明代前期には、海禁政策により民間の海外貿易によるタカラガイ輸入は途絶し、モルデイク産キイロダカラはインドシナ半島北部に設置された宣慰司の朝貢貿易や、海外諸国の朝貢貿易を通じて雲南に供給されていた。さらに一五世紀前期には、鄭和艦隊も乗員の私貨として大量のタカラガイを輸入していたようである。

しかし一五世紀中期には、明朝のビルマ侵攻にともなう政治的混乱、南海諸国の朝貢貿易の縮小、鄭和の南海遠征の終了などにより、朝貢貿易を通じたタカラガイ輸入は大きく減少した。それにもかかわらず、当時のタカラガイの対銀比価は、元代の三〇四割程度に下落している。雲南で出土する明初以前と明代のタカラガイの相違から見ても、この時期には雲南で交易手段・価値表示に用いられるタカラガイが、モルデイク産キイロダカラからハナビラダカラに変化し、それとともに比価が低下したのだと思われる。

そしてこの時期にタカラガイ、特にハナビラダカラの主要供給地として重要性を高めたのが琉球であった。琉球は一四三四年には五八八万個ものタカラガイを進貢し、その後も大量のタカラガイを朝貢使節の自進物として持ちこんでいる。それらのタカラガイは南京内庫から雲南に運ばれ、官員の俸給などとして支出された。那覇港の渡地村や御物城で首出土する大量のタカラガイは、進貢船の積荷として集積されたものであった。特に渡地村では計五一六二個のハナビラダカラが出土し、その六四%が一四世紀後半〜一五世紀前半の層位から出土する。また沖縄西岸の千原遺跡でもタカラガイの集積遺構が残されており、それらもおもに一五世紀中期以前に集められたものだと考えられる。沖縄からのタカラガイ輸出は一五世紀前中期にピークを迎えたが、一五世紀後期には自進物の持ち込み禁止やタカラガイの枯渇により減少したようである。

また先島では一四世紀後期に陶磁出土量が急増するとともに、白磁と青磁の出土数が逆転する。これは海禁により福建海商の先島来航が途絶し、白磁供給が急減するとともに、先島のタカラガイなどが朝貢貿易を通じて輸出されるようになり、その対価として輸入された龍泉窯青磁が先島に転送された結果であろう。しかし一五世紀中期以降、宮古島では西岸の住屋遺跡を除く多くの集落遺跡で陶磁出土が途絶しており、西岸の漲水浜はらみずを拠点とする勢力が、他の集落を圧倒してタカラガイの生産・交易を掌握したことを示す。一方、一五世紀後期に朝貢貿易によるタカラガイ輸出が急減すると、福建海商は八重山諸島に來航してタカラガイを入手したと思われ、オヤケアカハチの本拠とされるフルスト原遺跡では、この時期に陶磁出土量が増加を示す。しかし一六世紀には琉球王府が宮古島西岸勢力の先導でアカハチを排除し、八重山諸島のタカラガイ貿易も影響下に収めたようである。

このように本稿では、従来の琉球史研究では十分に注目されていなかったタカラガイ貿易に注目して、一四・一五世紀における先島・琉球の海外交流について再検討することを試みた。近年の古琉球期の歴史学・考古学研究では、グスク時代の開始から琉球王国の成立に至るプロセスを、東アジア海域交流の全体的動向のなかに位置づけ、特に九州方面から南下した移民集団の役割に注目して論じることが多い²⁹⁾。さらに本稿でタカラガイ交易を通じて論じたように、一四・一五世紀の琉球海域交流史は、東アジア海域にとどまらず、ユーラシア規模の交易拡大ともリンクしていたのである。

一三世紀後半以降、モンゴル支配下でユーラシアの東西を結ぶ海上貿易は拡大し、モルディブ産キイロダカラは、インド洋・南シナ海を往来する商船のバラストとして大量に運ばれ、交易成長による貨幣需要の増大と相まって、その流通範囲も大きく広がっていった。従来のインド・東南アジア大陸部・雲南などに加え、一四世紀にはモルディブ産キイロダカラは紅海・地中海を経てサハラ交易によりニジェール川流域にまで運ばれ、貨幣としてひろく流通した³⁰⁾。またそれらはペルシア湾から陸路でホラズムを北上し、ジョチ・ウルス治下の南ロシアにも流入して低額貨幣として用いられた³¹⁾。

アフロ・ユーラシア各地での交易拡大と貨幣需要の増大は、タカラガイ貨幣の供給増加を促し、雲南ではモルディブ

産キイロダカラ(真賦)のほか、他地域のタカラガイ(他賦)も大量に流入し、タカラガイ貨幣の階層化が進んでいく。そのなかで東アジアにおける新たなタカラガイの供給地として登場したのが、先島・沖縄であった。同時期には火薬兵器の発達と普及にとともに、火薬原料たる硫黄の需要も急増しており、福建海商がタカラガイや硫黄などを求めて沖縄・先島へと来航したのである。

また一四世紀は泉州から東南アジアへの龍泉窯青磁や福建産白磁の輸出がピークに達した時期でもあり、ペルシア湾など西アジアへの龍泉窯青磁の輸出も最盛期を迎えていた⁽²⁰⁾。そのなかで福建海商はタカラガイや硫黄の代価として、莆田窯にシエアを奪われた浦口窯・閩清窯の粗製白磁を、龍泉窯青磁や磁竈窯陶器とともに供給した。さらに明代には琉球の硫黄やタカラガイの輸出は、朝貢体制に組みこまれる。特に琉球のタカラガイ輸出がピークに達したのは一五世紀中期であるが、それも海陸の朝貢貿易や鄭和艦隊によるモルディブ産キイロダカラの供給減少と、それにとまう琉球産ハナビラダカラの準基準貨幣化という、ユーラシア規模の交易動向の変化の結果だったのである。

註

- (1) 渡久地健「琉球列島のサンゴ礁」(沖縄県史各論編第三巻「古琉球」、沖縄県教育委員会、二〇一〇年)
- (2) 木下尚子「南島貝文化の研究 貝の道の考古学」(法政大学出版局、一九九六年)。また同「サンゴ礁と遠距離交易」(前掲「古琉球」所収)も参照。
- (3) 高梨修「ヤコウガイの考古学」(同成社、二〇〇五年)。
- (4) 柳田国男「海上の道」(初刊一九六一年、『柳田国男全集』21、筑摩書房、一九九七年所収)。
- (5) 木下尚子「古代中国からみた琉球列島のタカラガイ」(『世界に拓く沖縄研究』第4回「沖縄研究国際シンポジウム」実行委員会、二〇〇二年)は、黄河流域の古代遺跡で出土するタカラガイが中国東南沿岸ルートで運ばれたと推測するとともに、琉球もこのルートにつながっていた可能性を示唆するが、具体的な検討は行われていない。

- (6) 伊波普猷「子安貝の琉球語を中心として——海巴と烏七孫必——」(初出一九三五年、「伊波普猷全集」第八卷、平凡社、一九七五年)。
- (7) 三島格「海巴と螺殻——琉球と中国華南の交渉——」(同「南島考古学——南島・大和および台湾・華南」第一書房、一九八九年)。
- (8) 島袋春美「県内出土の「タカラガイ製品」について」、「奄美・沖縄・先島諸島のタカラガイ利用」(同「南島骨貝文化の考古学」沖縄文化社、二〇二四年)。
- (9) 山口正士「サンゴ礁の貝類資源【2】タカラガイ属」(『海洋と生物』七五号、一九九一年)、「サンゴ礁の貝類資源【2】タカラガイ属」(その二)〜(その五)(『海洋と生物』七九、八一、八二、八三号、一九九二年)。以下、山口「サンゴ礁の貝類資源」、および山口「サンゴ礁の貝類資源」(その二)〜(その五)として引用する。
- (10) 上田信「貨幣の条件 タカラガイの文明史」(筑摩書房、二〇一六年)第四章「明朝と琉球王国」。なお時代は下るが、真栄平房昭は一九三〇年代にオランダ東インド会社、奴隷貿易の原資として琉球産タカラガイの買いつけを図ったことを指摘している。真栄平房昭「琉球海域史論(上)——貿易・海賊・儀礼——」(榕樹書林、二〇二〇年)八七〜九三頁、二四三〜二四六頁。
- (11) 木下尚子編「13〜14世紀海上貿易からみた琉球国成立要因の実証的研究——中国福建省を中心に——」(科研費研究成果報告書、熊本大学、二〇〇九年)。
- (12) 入江貴博「自然史と進化生態学をつなぐ海産腹足類の研究(1)——貝殻種内変異と形態分類——」(『日本生態学会誌』六八巻一、二〇一八年)二頁。なおキイロダカラ属という属名を設けず、タカラガイ科タカラガイ属(*genus Cypraea*)の種としてキイロダカラ(学名 *Cypraea moneta*)・ハナビラダカラ(学名 *Cypraea annulus*)を位置づける分類もある。
- (13) 山口前掲「サンゴ礁の貝類資源」二八七頁。なお世界各地のタカラガイ二五六種(亜種を含む)の図録として、黒住耐二解説・武井哲史標本写真「日本と世界のタカラガイ 自然が生み出す驚きの造形美」(誠文堂新光社、二〇〇一年)があり、日本に分布するタカラガイ八八種の図録として、池田等・淤見慶宏「タカラガイ・ブック——日本のタカラガイ図鑑——」(成山堂書店、二〇一七年)がある。
- (14) Bin Yang, *Covvrie Shells and Covvrie Money: A Global History*, Abingdon: Routledge, 2019, pp. 20-39.
- (15) Jan Hogendorn and Marion Johnson, *The Shell Money of the Slave Trade*, Cambridge: Cambridge University Press, 1986.

元明時代のタカラガイ交易と先島・琉球(中島)

- (16) Hans Ulrich Vogel, "Cowry Trade and Its Role in the Economy of Yunnan, the Ninth to the Middle of the Seventeenth Century," in Roderich Peak and Diemar Rothermund eds., *Emporia, Commodities and Entrepreneurs in Asian Maritime Trade, c. 1400-1750*, Stuttgart: F. Steiner, 1991; Hans Ulrich Vogel, *Marco Polo Was in China: New Evidence From Currencies, Salts and Revenues*, Leiden: Brill, 2013, ch. 3, 'Cowry Money Circulating in Yunnan and Southeast Asia'.
- (17) Yang, *Cowrie Shells and Cowrie Money*. 雲南にさけるタカラガイ流通の経緯は、上記の論考が基礎。Bin Yang, "Horses, Silver, Cowries: Yunnan in a Global Perspective," *Journal of World History*, vol. 15, no. 3, 2004; Bin Yang, *Between Winds and Clouds: The Making of Yunnan (Second Century BCE to Twentieth Century CE)*, New York: Columbia University Press, 2009, 6. 'Silver, Cowries, and Copper'; Bin Yang, "The Rise and Fall of Cowrie Shells: The Asian Story," *Journal of World History*, vol. 22, no. 1, 2011; Bin Yang, *Discovered But Forgotten: the Maldives in Chinese History, c. 1100-1620*, Columbia University Press, 2025, chapter 10, 'Cowrie Shells'.
- (18) 入江貴博「自然史と進化生態学をこなぐ海産腹足類の研究(2)——温度—サイズ則と体サイズの地理的変異——」(『日本生態学会誌』七五巻一号、二〇二五年) 一〇二—一〇八頁。
- (19) Hogenorm and Johnson, *The Shell Money of the Slave Trade*, p. 10. なおフィラデルフィア自然科学アカデミー所蔵の、モルディブのあも環礁で採集されたキノロダカラの殻長は10・5—15ミリもあり、ならに小型であった (*ibid.*, p. 11)。
- (20) Hogenorm and Johnson, *The Shell Money of the Slave Trade*, pp. 10-11. モルディブ以外のデータは、Crawford Cate と Maria and F. A. Schilder が、一九六四—六九年に『*The Veliger*』誌に発表した計測値による。
- (21) 山口前掲「サンゴ礁の貝類資源」(その2)。
- (22) Yang, *Cowrie Shells and Cowrie Money*, pp. 5-6.
- (23) Irie Takahiro, "Geographic Variation of Shell Morphology in *Cypraea annulus* (Gastropoda: Cypraeidae)," *Journal of Molluscan Studies*, vol. 72, no. 1, 2006, pp. 36-37.
- (24) 山口前掲「サンゴ礁の貝類資源」(その5) 四二〇—四二二頁。久保弘文・黒住耐二『生態—検索図鑑 沖縄の海の貝・陸の貝』(沖縄出版、一九九五年) 二四三頁。

- (25) 山口前掲「サンゴ礁の貝類資源」(その3) 二五七頁、表5。
- (26) 山口前掲「サンゴ礁の貝類資源」(その4) 三三六頁、表9。
- (27) 山口前掲「サンゴ礁の貝類資源」(その4) 三三九頁。
- (28) 山口前掲「サンゴ礁の貝類資源」(その3) 二五九頁、表7。
- (29) 中島樂章「元代雲南のタカラガイ流通と市舶司貿易」(『史苑』八六卷二号、二〇二六年)。本節の記述では煩を避けて、この論文で参照した史料や研究文献は注記しない。
- (30) 『元史』(中華書局、一九七六年) 卷二六、本紀二六、仁宗三、延祐四年十月戊午条、五八一頁。
- (31) 弘治『温州府志』(『天一閣藏明代方志選刊統編』第三三冊、上海書店、一九九〇年) 卷一七、遺事、蕃航、元、八二六頁。この記事については、従来の研究ではもっぱら藤田が紹介した、一六〇五(万曆三三)年序刊の万曆『温州府志』(『四庫全書存目叢書』齊魯書社、一九九五年、史部、第二二一冊) 卷一八、遺事により引用してきた。筆者も『大航海時代の海域アジアと琉球——レキオスを求めて——』(思文閣出版、二〇二〇年) 二二七頁において、万曆府志の記事を引用している。しかし伊藤正彦・大田由紀夫「宋元期「琉球」関係主要史料一覽(稿)」(木下編前掲『13〜14世紀海上貿易からみた琉球国成立要因の実証的研究』) 二六六頁に紹介するように、すでに弘治『温州府志』に同記事が収録されている。弘治・万曆府志の記事には内容的な相違はないが、文字の異動が散見する。
- (32) ひょうたんに入れた「青黄白色の串を成す硝珠」とは、ガラス玉を数珠状に連ねた装飾具であろう。また判読不能の字画を記した木片とは、積荷に関するなんらかの符号を記した木札のようだが明確ではない。
- (33) 藤田豊八「琉球人南洋通商の最古の記録」(初出一九一七年、『東西交渉史の研究 南海篇』(岡書院、一九三二年所収)。
- (34) 『成宗実録』(『朝鮮王朝実録』第一〇冊、国史編纂委員会、一九五八年) 卷一〇四、成化一五(成宗一〇)年五月辛未条、一五頁。
- (35) 東恩納寛惇「黎明期の海外交通史」(初刊一九四一年、『東恩納寛惇全集』3、第一書房、一九七九年所収) 六八六頁。また同「南島風土記」初刊一九五〇年、『東恩納寛惇全集』第七卷、第一書房、一九八〇年) 六八四〜六八七頁も参照。なお「保良」は現在では行政上「ボラ」と読むが、宮古島方言ではハ行オ段を「ロ」と発音するので、「保良」の本来の発音は「プラ」であり、「婆羅」(Phu-

ling) や「悖羅」(Pal-la) はその音写である。

- (36) 下地和宏「陶磁交易と宮古」(谷川健一編『日琉交易の黎明——ヤマトからの衝撃——』森話社、二〇〇八年) 三三六―三三九頁、同「グスク時代の宮古」(『宮古島市史』第一巻、通史編、宮古島市教育委員会、二〇一三年)。

- (37) 『雍正旧記』(『平良市史』第三巻、資料編1、前近代、平良市役所、一九八一年) 城辺之内、保良村、四七頁。「元島」^{もとしま}とは移転後の現集落に対し、かつての集落所在地を指す呼称である。

- (38) 一九六四年には、金子エリカとヘルベルト・メリヒヤルが保良元島遺跡の一部で発掘調査を行い、一九七二年に英文の報告書、Erika Kaneko and Herbert Melichar, *Pura Mutuzuma: Archaeological Work on Miyako Island, Ryukyus, Honolulu: University Press of Hawaii* を刊行している。同書によれば、この遺跡の層序は第一層(基岩)・第二層(粘土層)・第三層(中間層)・第四層(表土層)からなり、宋元青磁が第四層、明代青磁が第二層上部〜第四層、華南産陶器壺が第三層上部〜第四層から出土している。貿易陶磁の出土比率は、青磁が六二%、華南産陶器壺が二六%、華南産実用陶器が八%、朝鮮・ベトナム産陶磁が一%、不明が三%であった。また青磁の年代別では、明代中期(一五世紀)が六〇%、明代初期(一四世紀)が三五%、宋元が五%とされる。青磁の大部分は碗であり、底部の内外に施釉しないものも多いが、唐草・雷文などの横帯文や、蓮弁文・草花文・線文などを描くものも多く見られるという(*ibid.*, pp. 54-60)。

宋元陶磁はすべて表土層から出土しているので、この遺跡は明代以降の集落と考えられ、その附近に元代以前の保良集落が存在したであろう。なお金子らの報告書では、保良元島出土の青磁は「ほぼすべてが泉州地域の産品」であり、市場向けの民窯製品であったとする(*ibid.*, p. 56)。琉球列島で出土する一四〜一六世紀の青磁の大半は龍泉窯系であるが、そのなかには浙江西南部の龍泉一帯だけではなく、福建・広東で生産された粗製品も含まれるという(瀬戸哲也「14〜16世紀の沖縄出土龍泉窯青磁における生産地の模索」佐々木達夫編『中世陶磁器の考古学』第一巻、雄山閣、二〇一五年)。保良元島出土の青磁にも実際に泉州産が含まれている可能性はあるが、出土青磁の大部分が泉州産品というのは、他にそのような類例がなく疑問である。

- (39) 藤田前掲「琉球人南洋通商の最古の記録」四〇九〜四一一頁。

- (40) 東恩納前掲「黎明期の海外交通史」一七〜一八頁、同前掲「南島風土記」六八六頁。

- (41) 田中俊夫「沖繩の古代文化と沖繩文化の考え方」(初出一九五三年、新里恵二編『沖繩文化論叢』第一巻歴史編、平凡社、一九七二年所収) 一五六～一六二頁。
- (42) たとえば『平良市史』第一巻、通史編(平良市、一九七九年)六〇頁、下地前掲「陶磁交易と宮古」三三七頁などでは藤田説により「撒里即」をシンガポール方面とするが、下地和宏「集落の広がりと渡来人」(前掲『宮古島市史』第一巻、通史編)頁では、藤田のシンガポール説と田中の沖繩本島説を併記している。
- (43) Gregory Smits, *Early Ryukyuan History: A New Model*, Honolulu: University of Hawai'i Press, 2024, pp. 61-63; Gregory Smits, *The Ryukyu Islands: A New History from the Stone Age to the Present*, Chicago: The University of Chicago Press, 2025, pp. 80-81.
- (44) 陳侃(原田禹雄訳注)『使琉球録』(改訳新版、榕樹書林、二〇二二年)夷語附、一〇九～一二三頁。
- (45) 李鼎元『琉球訳』(佐藤武義他編『近世方言辞書』第六輯、港の人、二〇〇〇年)。
- (46) 中本正智『琉球方言音韻の研究』(法政大学出版局、一九七六年)一二六～一二七頁、一三八～一四三頁。
- (47) 上里隆史・山本正昭編『沖繩の名城を歩く』(吉川弘文館、二〇一九年)六一～六四頁。
- (48) 新里亮人『琉球国成立前夜の考古学』(同成社、二〇一八年)七〇～八三頁。なお古琉球期における出土陶磁については、一七世紀後半～一七世紀前半を七期に分けた瀬戸哲也の時期区分がひろく参照されている。新里区分のⅠ～Ⅲ期は瀬戸区分のⅠ～Ⅲ期とおおむね一致するが、一部の青磁の位置づけに相違がある。瀬戸哲也「琉球列島における貿易陶磁器出土量の実態」(琉球大学考古学研究室開設30周年記念論文集『琉球大学考古学研究室、二〇二四年)五七～六二頁。
- (49) 田中克子「中国陶磁器」(大庭康時他編『中世都市・博多を掘る』(海鳥社、二〇〇八年)一一三～一九頁、新里前掲『琉球国成立前夜の考古学』七〇～七三頁)。
- (50) 新里前掲『琉球国成立前夜の考古学』七三～八三頁、瀬戸哲也「考古学からみる琉球国の形成過程」(『歴史学研究』二〇二三号、二〇二二年)二～五頁。なお奄美大島の倉木崎海底遺跡や久米島のナカノ浜遺跡では、第Ⅱ期の中国陶磁が多数出土しており、福建から琉球・奄美諸島を経て九州に向かう陶磁輸出ルートが存在していた可能性も指摘されている(森達也『中国青瓷の研究——編年と流通——』汲古書院、二〇一五年、二二四～二二八頁)。

- (51) 新里前掲『琉球国成立前夜の考古学』七〇～八三頁。
- (52) 木下尚子「総括」(木下編前掲『13～14世紀海上貿易からみた琉球国成立要因の実証的研究』。二四九～二五二頁。
- (53) 新里前掲『琉球国成立前夜の考古学』八〇～八三頁、木下前掲「総括」二五一～二五三頁。
- (54) 亀井明徳「南西諸島における貿易陶磁器の流通経路」(『上智アジア学』一一号、一九九三年)二九～三〇頁。なお亀井は「日本貿易陶磁史の研究」(同朋舎出版、一九八六年)三七八～三七九でも、宋代の陶磁貿易について上記(A)～(C)の三パターンを想定し、当初は(A)により宋商船が琉球に中国陶磁をもたらしていたが、やがて琉球の有力按司が宋商人にかわって中国に貿易船を派遣するようになったと推論している。上記論文における議論はこの旧説を修正したものである。
- (55) 吉岡康暢・門上秀毅『琉球出土陶磁社会史研究』(真陽社、二〇一一年)三七四～三八四頁。なお吉岡は「一三世紀末に宮古勢力が突如能動的な華南通商を開始した背景として、「福州商船の先島への来航も否定したい」とも附言しているが(三八二頁)、あくまで宮古勢力による華南通商を促した契機として言及するに止まる。また最近では、新里亮人がやはり福建産粗製白磁の先島流入に注目して、一三世紀中期から先島など琉球列島各地の在地集団が、主導的に貿易陶磁を求めて交易活動に乗りだしたと論じている(前掲『琉球国成立前夜の考古学』八三頁)。
- (56) 小野正敏他「座談会 中世の琉球」(中世学研究会編『琉球の中世』高志書院、二〇一九年)一八四頁における発言。
- (57) 中村翼「琉球王国の形成と東アジア海域世界」(秋田茂・桃木至朗編『グローバルヒストリーから考える新しい大学歴史教育——日本史と世界史のあいだで——』(大阪大学出版会、二〇二〇年)二二二～二二三頁、関口広次「陶磁貿易と芋麻貿易」(佐々木達夫編『中近世陶磁器の考古学』一二巻、雄山閣、二〇二〇年)。
- (58) なお一五世紀後半～一六世紀初頭のアラビア語航海書では、琉球を「アル・グール」(al-Ghur)と称し、その手前には「ファリユーク」(Farīyūk)という島があると記している。筆者はさきに「アル・グール」は「高麗」の泉州音 *ko-lye* に、「ファリユーク」は「婆羅公」の泉州音 *po-lo-kaŋ* に由来し、いずれも元代泉州でムスリム海商が得た情報に由来すると考証した。すなわち(1) 元代の泉州では東方海上の高麗と琉球を区別せず、「高麗」(*ko-lye*)と総称し、(2) 泉州のムスリムもそれによって琉球を「アル・グール」(*al-Ghur*)と称したと思われる。(3) さらに泉州海商による先島交易が始まると、彼らは宮古島を東岸部の「保良」に由来する「婆

羅(公)「Porolon」という名称で呼び、(4)泉州のムスリム海商がそれを「フアリューク」(Farig)として伝えたのだと推定する。中島前掲『大航海時代の海域アジアと琉球』一二三～一三一頁参照。

- (59) 木下前掲「総括」二五二～二五七頁。なお田中克子は福建から北上する交易ルートが琉球を最終目的地としていたのか、博多を最終目的地とする交易ルートの途中で琉球が福建産粗製白磁を受容したのかは、確定しがたいと説く(田中克子「生産と流通」木下編前掲書、一三八～一四〇頁)。一方、田中の最近の論考では浦口窯白磁(今帰仁タイプ)の海外貿易について、まず福建と先島を結ぶ流通圏が形成され、それが沖縄諸島まで拡大したと説いており、必ずしも博多を目的地としない流通を想定しているようである(田中克子「海外消費地出土的浦口窯産品浅析——従日本出土情況看演變与流通」羊沢林主編『連江浦口窯址』海峡文芸出版社、二〇二二年)三二〇頁。

- (60) 金武正紀「今帰仁タイプとピロースクタイプの年代的位置付けと貿易港」(木下編前掲書)一三三～一三五頁。

- (61) 久貝弥嗣「伝説の争乱・与那覇原軍——宮古島の13世紀から15世紀にかけての防御的遺跡の消長に関する研究——」(おきなわ銀行ふるさと振興基金助成研究報告書、二〇一八年)一一八～一二二頁。久貝によれば、宮古島では沖縄諸島に対して今帰仁タイプやピロースクタイプI・IIの出土比率がかなり高く、福建産褐釉陶器の出土数も沖縄諸島よりきわめて多い。また沖縄諸島では日本本土より明銭の出土比率が高いのに対し、先島では明銭の出土が確認されていないという。また久貝は一三世紀後半以降、福建—先島間の陶磁貿易を担った主体として、泉州または福州を拠点とする交易集団を想定し、彼らが東南アジアに渡航する経由地として宮古島に寄航したと推測している。久貝が指摘するように、当時の福建—先島貿易を担ったのは、やはり福建の交易集団と見るべきであろう。ただし福建から東南アジアに渡航する商船は台湾海峡を南下するのが普通なので、それらが宮古島を経由して東南アジアに渡航したとは考えにくい。

- (62) 宮城弘樹・新里亮人「琉球列島における出土状況」(木下編前掲書)八六～八八頁、表5。

- (63) 柴田圭子「グスク時代における陶器の受容」(『南島考古』三四号、二〇一五年)二七頁。

- (64) 瀬戸哲也「那覇港—一括出土青磁外反碗の年代観」(『南島考古』四五号、二〇二五年)一一頁、図1。

- (65) 上里隆史「海の王国・琉球」『海域アジア』屈指の交易国家の実像(洋泉社、二〇二二年)五二～五五頁。なお中山西岸では那覇

- と浦添の中間の安謝川あじきがわ下流域で一四世紀前半以前の陶磁が多く出土しており、那覇港整備以前の主要交易港があった可能性が指摘されている。金武前掲「今帰仁タイプとピロースクタイプの年代的位置付けと貿易港」一三四～一三五頁、瀬戸哲也「那覇港整備以前の貿易陶磁の流通と交易形態——沖縄本島中南部を中心に——」〔南島考古〕三六号、二〇一七年）二二九～二三〇頁。
- (66) 一四世紀中期における「南島路」の成長については、榎本渉「東アジア海域と日中交流——九～一四世紀——」〔吉川弘文館、二〇〇七年〕第二章「元末混乱期の日元交通」参照。
- (67) 吉岡・門上前掲「琉球出土陶磁社会史研究」三八〇頁、関口前掲「陶磁貿易と苧麻貿易」一〇三頁。なお中村翼は粗製白磁の対価の候補として、与那国島などのヤコウガイの貝肉を挙げている。中村前掲「琉球王国の形成と東アジア海域世界」二二三頁。
- (68) 木材は福建の対岸の台湾で調達した方が低コストであり、元代には馬匹の供給が潤沢だったので、宮古馬を輸入する必要も低い。また泉州から先島に来航したのは比較的小型のジャンクだと思われ、大量の木材や馬を積み帰ったとも考えにくい。
- (69) 大瀨永巨「八重山の考古学」(先島文化研究所、一九九九年)一四一～一四五頁、同「八重山諸島の交易」(谷川健一編「日琉交流の黎明——ヤマトからの衝撃」森話社、二〇〇八年)三六六～二六八頁。
- (70) 中島前掲「元代雲南のタカラガイ流通と市舶司貿易」二三～二七頁。
- (71) 久貝前掲「伝説の争乱・与那覇原軍」五四～五七頁。また保良元島遺跡でも、褐釉陶器壺(スピガミ)は出土貿易陶磁の二六%を占めている(Kaneko and Melichar, *Pura Mizuzuma*, pp. 54-55, 60-61)。
- (72) 森達也「大陸と列島をつなぐ陶器器流通ルートの様相——11～12世紀を中心に——」(藪敏裕他編「貿易陶磁器と東アジアの物流——平泉・博多・中国——」高志書院、二〇一九年)一〇〇～一〇一頁。田中克子によれば、高越城趾出土の褐釉陶器壺も磁窠窯産だという(久貝前掲「伝説の争乱・与那覇原軍」五四頁)。
- (73) 下地馨「宮古曲玉の研究」(初出一九四四年、沖縄県史料 前近代9 考古関係資料(1))〔沖縄県教育委員会、一九九六年所収〕四八六頁、大瀨前掲「八重山の考古学」一四四頁。
- (74) 前掲「雍正旧記」平良之内、大浦村、四九頁。
- (75) 久貝弥嗣「宮古のグスク時代の展開に関する一考察」〔南島考古〕三三三号、二〇一四年)二〇～二二頁。

- (76) 下地和宏「集落の広がりと渡来人」(前掲『宮古島市史』第一巻、通史編)。
- (77) Roderich Plak, "The Northern Trade Route to the Spice Islands: South China Sea - Sulu Zone - North Moluccas (14th to early 16th century)," in Roderich Plak, *China's Seaborne Trade with South and Southeast Asia (1200-1750)*, Aldershot: Ashgate, 1999, pp. 29-33.
- (78) 汪大淵(蘇繼順校釈)『島夷誌略校釈』(中華書局、一九八一年)「前言」九〇―一頁。
- (79) 汪大淵前掲『島夷誌略校釈』「琉球」一六―一七頁。
- (80) 汪大淵前掲『島夷誌略校釈』「琉球」二二―二三頁、注釈⑧。
- (81) 岸本竹美「グスク時代及び近世出土の玉製品に関する考察」(『沖縄埋文研究』1、二〇〇三年)。
- (82) 森前掲「大陸と列島をつなぐ陶瓷器流通ルートの様相」一〇二―一〇三頁。
- (83) 森前掲「大陸と列島をつなぐ陶瓷器流通ルートの様相」一〇〇―一〇一頁。
- (84) 森本朝子「東南アジアにおける14世紀前後の福建陶磁——インドネシア・マレーシア・フィリピン遺跡の出土遺物——」(木下編前掲『13〜14世紀海上貿易からみた琉球国成立要因の実証的研究』)。
- (85) 山内晋次「海を渡る硫黄——14〜16世紀前半の東アジア海域」(鈴木英明編『東アジア海域から眺望する世界史——ネットワークと海域』明石書店、二〇一九年)二六―二七頁。
- (86) 山内晋次「日宋・日元貿易期における「南島路」と硫黄交易」(『国立歴史民俗博物館研究報告』二二三集、二〇二一年)二七四―二七八頁。
- (87) 瀬戸哲也「今帰仁グスクにおける貿易陶磁研究——年代観と出土量を中心に——」(『貿易陶磁研究』四三、二〇二三年)。
- (88) 宮城前掲『琉球王国とグスクの考古学』四八―七六頁。
- (89) 『太祖実録』巻一〇五、洪武九年三月甲申条、一七五四頁。
- (90) 石黒ひさ子「南宋福州の鉄生産——『三山志』「爐戸」と沈没船資料による検討——」(『東洋学報』一〇七巻三号、二〇二五年)。
- (91) 上田前掲「貨幣の条件」第四章「明朝と琉球王国」Vogel, "Covry Trade and Its Role in the Economy of Yunnan"; Yang, *Cowrie Shells and Cowrie Money*, pp. 110-117.

元明時代のタカラガイ交易と先島・琉球(中島)

- (92) 方国瑜「雲南用具貨幣の時代及貝の来源」(『雲南社会科学』一九八一年一期)。同論文も含め、一九九〇年代までの雲南のタカラガイ流通に関する主要研究は、楊寿川編「貝幣研究」(雲南大学出版社、一九九七年)に収録されている。
- (93) 詹恩勝「明代在雲南地区実行的貨幣政策及其変遷」(『長庚人文社会科学報』八卷二期、二〇一五年)、万明「明代白銀貨幣化・雲南海貝貨幣消亡の新視野」(『澳門研究』二〇一七年三期)、王雪瑩「明代雲南衛所經濟中的海肥与銀兩——兼論雲南貝幣流通的衰微」(『思想戰線』二〇二二年三期)。
- (94) 李春円「元代雲南經濟碑刻二通考釈——兼論碑文所見的土地交易」(『元史及民族与辺疆研究集刊』三六輯、二〇一八年)。
- (95) 王准「貝生賦」与中国及周辺国家貝幣文化考論(『天中学刊』三六卷六期、二〇二二年) 六六〇―六八頁。
- (96) なお無極は上記部分に続いて、「小なる者は貞と名づけ、交州に出ず。大なる者は航と名づけ、日南に出ず」と記す。交州・日南は漢代にベトナム北部・中部に置かれた郡名だが、ベトナム北部で特に小型のタカラガイを産出したことは確認できない。交州・日南は実際の産地を指すというよりも、詩賦という性質上、古代の郡名を雅語として対句的に記したものである。
- (97) 积法天「朝天集」(叢書集成統編第一一〇冊、上海書店、一九九四年)「貝生賦」八一〇―八一頁。王前掲論文七〇頁参照。
- (98) 「太祖実録」(中央研究院歴史語言研究所、一九六二年) 卷二六九、洪武一七年十二月壬子条、二五七七頁。
- (99) 張学顔等「万曆會計録」(北京図書館古籍珍本叢刊五二、書目文獻出版社、一九八八年) 卷一三「雲南布政司田賦沿革事例」四九五―九頁。万前掲「明代白銀貨幣化」二二四頁参照。
- (100) 詹前掲「明代在雲南地区実行的貨幣政策及其変遷」四二〇―四二二頁、万前掲「明代白銀貨幣化」二二二―二二三頁。
- (101) 上田前掲「貨幣の条件」一五一―一五二頁、万前掲「明代白銀貨幣化」二二三頁、楊前掲「琉球的進貢」二〇六―二〇七頁。
- (102) 詹前掲「明代在雲南地区実行的貨幣政策及其変遷」四二〇―四二三頁、万前掲「明代白銀貨幣化」二二二―二二五頁。
- (103) 方慧「從金石文契看元明及清初雲南使用貝幣的情況」(楊編前掲「貝幣研究」所収)。
- (104) Vogel, *Marco Polo Was in China*, pp. 254-255, Map. 4.
- (105) 古島琴子「攀枝花の咲くところ 雲南タイ族の世界」(創土社、二〇〇一年) 七八―八二頁、楊虎得・柏樺「明代宣慰与宣撫司」(『西南大学学报(社会科学版)』四二卷二期、二〇一六年) 一七四頁。

- (106) 古永継「明代雲南土官朝貢評述」、『思想戦線』一九九三年一期。
- (107) 万曆『大明会典』(新文豊出版公司、一九七六年)卷二〇八、朝貢四、土官、一六一六〜一六一八頁。
- (108) 劉文徵『滇志』(雲南教育出版社、一九九一年)卷三〇、羈縻志第二二、屬夷、附貢道、九八五〜九九四頁。万前掲「明代白銀貨幣化」二二〇〜二二二頁参照。
- (109) 伊東利勝「エーヤールワディ流域における南伝上座仏教政治体制の確立」(石澤良昭編『東南アジア古代国家の成立と展開』岩波書店、二〇〇一年)二八七〜二九五頁。
- (110) 飯島明子・小泉順子『タイ史』(山川出版社、二〇二〇年)七四〜一二三、一四八〜一七二頁。
- (111) 馬歡(万明校注)『明鈔本《瀛涯勝覽》校注』(海洋出版社、二〇〇五年)三四頁。
- (112) 黎道綱「上水考」(『東南亞』一九九七年三期)。
- (113) 正徳『大明会典』(汲古書院、一九八九年)第二冊、卷九七・九八、朝貢二・三、事例、三五九〜三六八頁。
- (114) 邵磊・朱巍「浅析与鄭和下西洋有関的兩種武官墓誌」(『南京曉莊学院学报』二〇一四年二期)一一〇〜一二三頁にこの墓誌の全文を紹介し、その内容を考証している。また田口宏二朗『大運河と「帝国」——明代における南北中国の構築——』(名古屋大学出版会、二〇二六年)七一〜七五頁でも、上掲論文によりこの墓誌を検討し、鄭和艦隊の乗員が私的に自由貿易を行っていたことを示すと論じる。
- (115) 邵・朱前掲「浅析与鄭和下西洋有関的兩種武官墓誌」一一〇頁。田口前掲『大運河と「帝国」』七三頁参照。
- (116) 邵・朱前掲「浅析与鄭和下西洋有関的兩種武官墓誌」一一一頁。
- (117) 小川博「中国人の南方見聞録 瀛涯勝覽」(吉川弘文館、一九九八年)二一六〜二二二頁。
- (118) 『太宗実録』(中央研究院歴史語言研究所、一九六二年)卷一一六、永樂九年六月丁未条、一四七九頁。上田前掲「貨幣の条件」一五四〜一五五頁参照。
- (119) 『英宗実録』卷八八、正統七年正月辛卯条、一七七八頁。
- (120) 陳循等『寰宇通志』(『玄覽堂叢書續集』第八〇冊、国立中央図書館、一九八五年)卷一一二、臨安府。

元明時代のタカラガイ交易と先島・琉球(中島)

- (121) 『孝宗実録』(中央研究院歴史語言研究所、一九六二年) 卷一九七、弘治一六年三月戊子条、三六四四〜三六四七頁。
- (122) 詹前掲「明代在雲南地区実行の貨幣政策及其変遷」四二三〜四二四頁。
- (123) 中島榮章「14-16世紀、東アジア貿易秩序の変容と再編——朝貢体制から1500年システムへ——」(『社会経済史学』七六卷四号、二〇一一年) 九〜一五頁。なお東南アジア諸国の朝貢回数には、永樂〜宣徳年間の大半は明朝支配下にあったベトナムを含まない。
- (124) 龍中「明朝」三征麓川「叙論」(『思想戦線』一九八七年四期)、古島前掲「攀枝花の咲くところ」八二〜九九頁。
- (125) 中島前掲「元代雲南のタカラガイ流通と市舶司貿易」一三、二二頁。
- (126) 康熙「新興州志」に引く明末の雲南巡撫閔洪学(一六二一〜二六「天啓元〜六」年任)の上奏には、明初における比価は銀一兩⇨タカラガイ八〇〇〇個だったと記している(李家瑞「古代雲南貝幣の大概情形」『歴史研究』一九五六年九期、九三頁)。ただしこれは明初から二五〇年近く後の記述であり、タカラガイの比価が一四世紀前期の銀一兩⇨タカラガイ二四〇〇個から、一四世紀後期には銀一兩⇨タカラガイ八〇〇〇個まで急落したとも考えにくく、信憑性には疑問がある。
- (127) 正徳「大明会典」(汲古書院、一九八九年) 第一冊、卷三〇、戸部一五、俸給二、三二八頁。
- (128) 『英宗実録』卷四五、正統三年八月辛巳条、八八二〜八八三頁。
- (129) 『憲宗実録』(中央研究院歴史語言研究所、一九六二年) 卷二二二、成化一七年二月癸亥条、三八二九頁。宝鈔とタカラガイの換算率に大きな幅があるのは、雲南各地でそれらの流通量が大きく異なるからだと思われる。
- (130) 彭前掲「中国貨幣史」四九四頁。
- (131) 一五世紀後半には金の対銀比価も元代の八割程度に低下しているが(彭前掲「中国貨幣史」五二六頁)、タカラガイの対銀比価低下はそれよりもかなり大きい。
- (132) 前掲「万厯會計録」卷一三「雲南布政司田賦沿革事例」四五八頁、万前掲「明代白銀貨幣化」一二三〜一二四頁。
- (133) 王大進「雲南出土貨幣概述」(『四川文物』一九八八年五期) 二七〜二八頁、湯国彦「雲南歴史貨幣」(雲南人民出版社、一九八九年) 六二頁、Vogel, *Marco Polo Was in China*, pp. 228, 257.
- (134) 関連する研究は多いが、近年の代表的総説として、高木久史「撰錢とビタ一文の戦国史」(平凡社、二〇一八年) 一三三〜二一五

- 頁、黒田明伸「歴史のなかの貨幣 銅銭がつかない東アジア」(岩波書店、二〇二五年) 一二五～一七七頁参照。
- (135) 黒田前掲「歴史のなかの貨幣」一三四～一三六頁。
- (136) 方前掲「雲南用具作貨幣の時代及貝的來源」三八～三九頁、Vogel, "Covry Trade and Its Role in the Economy of Yunnan," pp. 254-255, 上田前掲「貨幣の条件」一七〇～一七一頁。なお一五四(嘉靖一九)年には騰越州において、タカラガイ一九八二一索を銀三六〇両で代納させることを定めており(方前掲論文三八頁)、換算率は銀一両⇨タカラガイ四四〇四個となるが、この場合は銀による代納が政府に有利になるように、タカラガイの対銀比価をかなり高めに設定したのだろう。
- (137) 一七世紀の雲南におけるタカラガイ流通の崩壊とその要因については、張彬村「十七世紀雲南貝幣崩潰の原因」(『中国海洋發展史論文集』第五輯、中央研究院中山人文社会科学研究所、一九九三年)、Vogel, "Covry Trade and Its Role in the Economy of Yunnan," pp. 288-291, 上田前掲「貨幣の条件」一七〇～二〇八頁、方前掲「明代白銀貨幣化」一二二～一三三頁、王前掲「明代雲南衛所經濟中的海肥与銀兩」一五一～一五三頁などを参照。
- (138) 上田前掲「貨幣の条件」一六三～一六九頁。
- (139) 楊斌「琉球的進貢——元明時期江南海貝的來源」(『海洋史研究』一九輯、二〇二三年)。
- (140) 小葉田淳「中世南島通交貿易史の研究」(初刊一九三九年、再刊刀江書院、一九六八年) 二六四～三二五頁。
- (141) 小葉田前掲「中世南島通交貿易史の研究」二六五～二八八頁、池谷望子「琉球の國際貿易の開始」(『南島史学』七七・七八号、二〇二一年)。
- (142) 小葉田前掲「中世南島通交貿易史の研究」二九八～三二二頁。
- (143) 和田久徳校訂『歴代宝案 校訂本』第一冊(沖縄県教育委員会、一九九二年) 四〇三～四〇四頁(文書番号一―二―二)、五三六～五三八頁(文書番号一―一六―二二)。
- (144) 正徳『大明会典』(汲古書院、一九八九年) 第二冊、卷九七、礼部五六、朝貢二、三六一頁。万曆『大明会典』(新文豊出版公司、一九七六年) 第三冊、卷一〇五、礼部六三、朝貢一、一五八七～一五八八頁。いずれも全朝貢国のなかで、貢物のなかに「海巴」を含むのは琉球だけである。

元明時代のタカラガイ交易と先島・琉球(中島)

- (145) 『英宗実録』巻一五、正統元年三月丁卯条、二七五頁。また『明史』琉球伝にも、「初め閩に入る時、止だ貢物を具して報聞す。下人の齎らす所の海肥・螺殼は開報を失し、悉く官司の没入する所と為る」という記事がある。『明史』（中華書局、一九七四年）巻三二三、列伝二一〇、外国四、琉球、八三六四頁。上田前掲『貨幣の条件』一六三〜一六四頁参照。
- (146) 『英宗実録』巻二七、正統二年二月壬申条、五三九頁。
- (147) 万曆『大明会典』第三冊、巻一一三、給賜四、給賜番夷通例、一六六四頁。
- (148) 『英宗実録』巻三五、正統二年十月辛未条、六八三頁。
- (149) 『英宗実録』巻六八、正統五年六月辛未条、一三〇一頁。
- (150) なお楊斌は一五四〇年に南京内庫から雲南に送られたタカラガイは、おもに琉球とモルディブの朝貢貿易によって供給されたと言く（楊前掲『琉球的進貢』二〇五〜二一五頁、Yang, *Discovered but Forgotten*, pp. 164-147）。ただし楊斌はモルディブが正統年間に三回にわたり朝貢したと記すが（『琉球的進貢』二〇七頁）、そのような事実はない。一方、楊斌は琉球列島においてタカラガイを採集・輸出した歴史的証拠はなく、琉球船が東南アジアからモルディブ産タカラガイをバラストとして積み帰り、それを朝貢貿易により明朝に再輸出したのだと推論する（『琉球的進貢』二〇七〜二二二頁、*Discovered but Forgotten*, pp. 164-147）。しかし琉球ではタカラガイを採集しないというのは明らかな誤認である。また琉球船が東南アジア諸国からタカラガイを積み帰った可能性はあるとしても、琉球が明朝に輸出したタカラガイの大部分はより調達コストが低い本国産にちがいない。
- (151) 小葉田前掲『中世南島通交貿易史の研究』三一八〜三二三頁。
- (152) 山口前掲『サンゴ礁の貝類資源』二八九頁。
- (153) 中島楽章「一五四〇年代の東アジア海上貿易と琉球・九州」（『史学雑誌』一三三編七号、二〇二四年）三〜四頁。
- (154) 新田重清「基地内文化財調査報告——御物城の考古学的知見——」（『沖縄県立博物館紀要』三号、一九七七年）。
- (155) 那覇市教育委員会文化財課『渡地村跡』（那覇市文化財調査報告書91、那覇市教育委員会、二〇二二年）一五〜三一頁。
- (156) 前掲『渡地村跡』六〇〜七七頁、一一〇〜一五七頁、長堂綾・島弘「渡地村跡の概要と青磁集中部」（『貿易陶磁研究』三五、二〇一五年）。瀬戸哲也による琉球出土青磁の形式分類によれば、第IV層の細連弁文碗はVI類、第五層の無文外反碗はIV類新相・IV類・

V類に当たる。渡地村における青磁の磁器別・形式別出土数については、瀬戸前掲「那覇港一括出土青磁外反碗の年代観」一四頁、附表を参照。

(157) 前掲『渡地村跡』六〇～一〇一頁。

(158) 前掲『渡地村跡』三〇七～三一頁。なお未加工のタカラガイのほかに、漁網のおもり(漁網錘)などのタカラガイ加工製品も計五五二点出土している。内訳はハナマルユキ一四点、ハナビラダカラ一〇五点、キイロダカラ六点であり、比較的大型のハナマルユキがもっとも多い。また中国銅銭の出土数は、第Ⅶ・Ⅵ層が五三枚(うち明銭一八枚)、第Ⅴ層が三六〇枚(明銭一五八枚)、第Ⅳ層が一九一枚(明銭九八枚)となり、やはり一四世紀末～一五世紀前半に大きなピークを示す。明銭は洪武通宝が大半を占めるが、時代が下るとともに永樂通宝も漸増する(同書二四九～二八一頁)。

(159) 瀬戸哲也「14・15世紀の沖縄出土中国産青磁について」(『貿易陶磁研究』三五、二〇一五年)一七～一八頁、同前掲「考古学からみる琉球国の形成過程」二頁、表1。

(160) 中島楽章『琉球王国の南海貿易』(吉川弘文館、二〇二五年)九一～九七、一三二～一三四頁。

(161) 沖縄県立埋蔵文化財センター編『東村跡』(沖縄県立埋蔵文化財センター、二〇一七年)二五〇～二八四頁。

(162) 今帰仁村教育委員会編『今帰仁城跡発掘調査報告Ⅰ・Ⅱ』(今帰仁村教育委員会、二〇〇九年)三四〇～三六〇頁(黒住耐二執筆)。

(163) 北谷町教育委員会編『千原遺跡』(北谷町教育委員会、二〇一八年)一三～三〇頁、六九～八九頁、一三六～一四四頁。

(164) 前掲『千原遺跡』一一二～一六頁、一四五～一六七頁。なおハナマルユキの殻高は二八～三八ミリに分布し、最頻値は三二ミリである。黒住耐二によれば、この集積遺構はタカラガイの軟体部を腐食させて除くために土中に埋めたか、カゴなどに入れて地上に放置したものだと考えられるという(同書一四七頁)。またこの集積遺構のほかに、漁網用の貝錘と思われる有孔貝製品として、ハナマルユキ二一個、ハナビラダカラ一八個、キイロダカラ二個が出土している(同書一〇〇～一一〇頁)。

(165) 前掲『千原遺跡』付録CD「タカラガイ集積遺構出土貝類計測表」三～四頁による。

(166) 北谷町教育委員会編『伊礼原D遺跡』(北谷町教育委員会、二〇〇八年)一七二～一七四頁(黒住耐二執筆)。一方、千原遺跡出土のハナマルユキの殻長最頻地は三二・〇ミリとハナビラダカラより一〇ミリ以上大きい。ただし千原遺跡でも渡地村跡でも、三種の

元明時代のタカラガイ交易と先島・琉球(中島)

タカラガイは未選別のまま集積されている。また貿易品倉庫であった御物城でも、三種のタカラガイが混在して出土しており(同書一七三頁)、ハナマルユキも装飾具などとして、ハナピラダカラ・キイロダカラと一括して輸出された可能性がある。

(167) 前掲『千原遺跡』一四七～一四八頁。

(168) 前掲『千原遺跡』六九～八〇頁。

(169) 前掲『渡地村跡』三〇八頁、第56表。

(170) 新里前掲『琉球国成立前夜の考古学』八一～八二頁。

(171) 池谷初恵他「中世琉球における貿易陶磁調査Ⅰ」(『国立歴史民俗博物館研究報告』二二六集、二〇二一年)。なお村木らの共同研究では古琉球期の陶磁出土状況をⅠ期～Ⅵ期に区分するが、Ⅳ期はⅣa期とⅣb期に分かれるので計七期となる。各期の区分は瀬戸哲也による時期区分と若干の相違はあるがほぼ共通する。

(172) 池谷初恵「先島諸島における貿易陶磁の動態とムラの成立に関する課題」(『国立歴史民俗博物館研究報告』二二六号、二〇二一年)一四五～一四八頁。

(173) 池谷前掲論文、一四五～一五〇頁。

(174) 池谷前掲論文、一五九～一六一頁。

(175) 久貝前掲「伝説の争乱・与那覇原軍」五四～五七頁。

(176) 中島樂章「洪武初年の海外貿易」(『東洋学報』一〇三巻四号、二〇二二年)五六～五七頁。

(177) 瀬戸前掲「考古学からみる琉球国の形成過程」七～八頁。

(178) 明初における貿易ルートの変化は、中国銭の出土動向にも反映している。渡地村跡では第Ⅵ～Ⅶ層(一四世紀中期以前)出土の中国銭は五三枚(うち明銭一八枚)に止まるが、第Ⅴ層(一四世紀後半～一五世紀前半)出土の中国銭は三六〇枚(うち明銭一五八枚)に急増する(前掲『渡地村跡』二四九～二五三頁)。これに対し、宮古島では九か所の主要遺跡で唐宋銭が計三七枚出土しているが、明銭は現時点で一枚も出土していない(久貝前掲「伝説の争乱・与那覇原軍」六六～七八頁)。一四世紀中期までは先島に来航した福建海商が、若干の唐宋銭をもたらしたのであろう。しかし明代には福建海商の先島来航は途絶し、朝貢貿易により沖繩に流

入した明銭も、先島には運ばれなかったため、先島への明銭流入が途絶したのだと思われる。

(179) 得能壽美「中山政權と宮古・八重山」(前掲、沖縄県史各論編第三卷「琉球」)二四二〜二四七頁、下地利幸「目黒盛豊見親と与那覇原軍」(前掲「宮古島市史」第一卷、通史編)、久貝前掲「伝説の争乱・与那覇原軍」三〜一一頁。

(180) 『太宗実録』卷三一、永樂二年五月甲辰条、五五六頁。

(181) 小葉田前掲「中世南島通交貿易史の研究」一〇一〜一〇八頁。

(182) 申叔舟(村井章介訳注)『海東諸国紀——朝鮮人の見た中世の日本と琉球——』(岩波書店、一九九一年)三九〇〜三九一頁「琉球国之図」では、本島沿岸に六つの港湾を描く。村井章介はそのうち「越法具足城」(大城グスク)と「玉具足城」(玉城グスク)の間に描かれた「浦」を佐敷附近の馬天港に比定する。村井章介「古琉球 海洋アジアの輝ける王国」(KADOKAWA、二〇一九年)九五〜九七頁。

(183) 村井前掲「古琉球」九七頁。

(184) 『佐敷上グスク』(佐敷町教育委員会、二〇〇三年)、上里・山本編前掲「沖縄の名城を歩く」六一〜六四頁。佐敷グスクでは「佐敷タイプ」と称される一四世紀末〜一五世紀初頭の龍泉窯系青磁碗(瀬戸分類IV類)も多数出土する。瀬戸前掲「14・15世紀の沖縄出土中国産青磁について」二二頁参照。

(185) 蔡温「中山世譜」(琉球史料叢書第四卷、東京美術、一九七二年)卷四、尚巴志王、五四頁。

(186) 蔡温前掲「中山世譜」五四〜五五頁。なお蔡温『中山世譜』に先行する羽地朝秀『中山世鑑』や蔡鐸『中山世譜』では、佐敷按司尚巴志は一三九二年に山南王を倒して王位を奪い、ついで中山王を破ったと記しており、それによって『明実録』に記す山南王汪応祖とは実際には尚巴志を指すとする見解もある(和田久徳「琉球国の三山統一についての新考察」(同)『琉球王国の形成——三山統一とその前後——』榕樹書林、二〇〇六年所収)。ただし『明実録』に記す汪応祖と尚巴志を同一人物と見なすのは難しく、ここでは安里進「考古学からみた琉球史 上——古琉球世界の形成——」(おきななわ文庫、二〇二二年)二一八〜二六八頁、村井前掲『古琉球』九九〜一〇四頁の見解に従う。

(187) 池谷前掲「先島諸島における貿易陶磁の動態とムラの成立に関する課題」一四五〜一五〇頁。

元明時代のタカラガイ交易と先島・琉球(中島)

- (188) 村木二郎「先島の集落遺跡から見た琉球の帝國的様相」(『国立歴史民俗博物館研究報告』二二六集、二〇二二年) 二六〇―二三四頁。
- (189) 久貝前掲「宮古のグスク時代の展開に関する一考察」。
- (190) 久貝前掲「伝説の争乱・与那覇原軍」一二〇―一七、一二六―一二二頁。
- (191) 得能前掲「中山政權と宮古・八重山」二四二―二四七頁、下地前掲「目黒盛豊見親と与那覇原軍」、久貝前掲「伝説の争乱・与那覇原軍」三〇―一二頁。
- (192) 宮古島の郷土史研究では、与那覇原軍は一四世紀後半に生じ、一三九〇年に中山王国に朝貢した与那覇勢頭豊見親よなはせとゆうみかみは与那覇原の生き残りだとする見解と、与那覇原軍は一五世紀初頭に生じ、与那覇勢頭豊見親と与那覇原とは無関係だとする見解がある。久貝前掲「伝説の争乱・与那覇原軍」六〇―七頁参照。
- (193) 久貝前掲「伝説の争乱・与那覇原軍」一四頁、第3図。
- (194) 久貝前掲「伝説の争乱・与那覇原軍」一二二頁。
- (195) 蔡温前掲「中山世譜」卷三、察度王、四四頁。
- (196) 山南王権の実態については確実な史料が乏しく諸説があるが、ここでは安里前掲「考古学からみた琉球史 上」、二二一―二四七頁、村井前掲「古琉球」九七―一一頁の理解に従う。
- (197) 久貝前掲「伝説の争乱・与那覇原軍」一二二頁。
- (198) 大瀧前掲「八重山の考古学」二〇一―二二二頁、同前掲「八重山諸島の交易」三六六―三六八頁。
- (199) 関口広次「名蔵シタダル海底遺跡採集明代陶磁器の研究」(『沖縄県石垣島名蔵シタダル海底遺跡共同研究報告書』先島文化研究所、二〇〇九年)。
- (200) 中島前掲「琉球王国の南海貿易」九六―九七頁。
- (201) 一五世紀後期以降の漳州湾―琉球間の密貿易については、中島前掲「一五四〇年代の東アジア海上貿易と琉球・九州」三―一一頁参照。
- (202) 池谷前掲「先島諸島における貿易陶磁の動態とムラの成立に関する課題」一四八―一五〇頁。村木前掲「先島の集落遺跡からみた

琉球の帝国的様相」一三四～一三五頁。

(203) 池谷前掲論文、一五四～一五六頁。村木前掲論文、一一六～一三七頁。

(204) 関口前掲「名蔵シタダル海底遺跡採集明代陶磁器の研究」五八～五九頁。

(205) 得能前掲「中山王権と宮古・八重山」二五五～二五七頁、村木前掲「先島の集落遺跡からみた琉球の帝国的様相」一三四～一三五頁、同「島々からみた琉球帝国とは」(『歴史学研究』一〇二三号、二〇二二年) 七一頁。

(206) 得能前掲「中山王権と宮古・八重山」二五七～二五九頁。

(207) 最近の代表的論考として、歴史学の立場からは中村前掲「琉球王国の形成と東アジア海域世界」、考古学の立場からは瀬戸前掲「考古学から見る琉球国の形成過程」を挙げておく。

(208) Yang, *Cowrie Shells and Cowrie Money*, pp. 160-168.

(209) 安木新一郎「貨幣が語るシヨチ・ウルス」(清風堂書店、二〇二三年) 一三二～一四九頁。

(210) 中島樂章「琉球の南海貿易と青磁輸出」(『南島考古』四五号、二〇二五年)。

【附記】本稿執筆に際し、瀬戸哲也氏には沖縄考古学について多くのご教示をいただくとともに、草稿に目を通してご批評を加えていただいた。ここに記して厚く謝意を表したい。